

市民・企業・行政のパートナーシップによる源兵衛川再生

三島現地調査報告書

~自然再生に向けた合意形成~



第二東京弁護士会
環境保全委員会

はじめに

富士山の南東に位置する静岡県三島市は、かつては富士山に降った雨雪を起源とする伏流水がこんこんと湧き出し、「水の都・三島」と呼ばれていた。

三島市にも高度成長の波が押し寄せ、今回のテーマである「源兵衛川」の水も枯れ、ドブ川化した。

本現地調査は、ドブ川化した源兵衛川の再生をいかに達成したかに関するものである。

ドブ川化した責任を他者に押し付けるのではなく、意見の違う他者と対立するのではなく、どうすれば源兵衛川が昔の姿に戻るのかを考える。

源兵衛川の昔の姿とはどのようなものだったのか、自然再生の目標はいつの時代のどのような姿なのか、生態系などは復活するのかを考える。

難問ばかりが立ちはだかる中、源兵衛川の再生は、市民と企業と行政がパートナーシップを組んで相互に協議して話し合っただけで達成した成功例である。

源兵衛川の再生に伴い、源兵衛川の水辺環境が徐々に復活したほか、地域に憩いの場を提供し、多くの観光客が訪れ、水辺周辺の街が活性化した。

問題や紛争を解決する方法は、様々なものがあるが本現地調査では、相互に協議すること、時間をかけて対応すること、専門家の意見を交えて多角的に検討することの重要性を感じた。

そして、各自が認識・意識を変え、各自が主体的に紛争を解決するために何ができるのか、どうすればいいのかを考えること、各自が紛争解決に志をもって行動することが解決への第一歩になる。

市民・企業・行政のパートナーシップによる解決は、自然再生のみでなく、様々な地域社会の問題解決のための方法としても参考になると思う。

最後に、本現地調査にご協力いただいたすべての関係者の皆様方に心から深く感謝申し上げます。

第二東京弁護士会 環境保全委員会
委員長 高橋 邦明

目次

現地調査スケジュール	4
三島駅・源兵衛川周辺地図	6
現地調査プレ講義報告書	7
源兵衛川周辺の調査報告書	14
源兵衛川再生に関わった関係者ヒアリング報告書	
行政関係	20
協力企業	25
協力民間団体	29
協力専門家	37
三島市周辺の調査報告書	
松毛川	54
せせらぎシニア元気工房	57
全体総括・質疑応答	59
源兵衛川が問うもの	62

現地調査スケジュール

平成25年6月14日金曜日

- 10:00 集合（JR三島駅 南口改札前）
- 10:00 源兵衛川周辺の調査
三島駅→鏡池→菰池公園→白滝公園→楽寿園・小浜池
→宮さんの川・ほたるの里
→源兵衛川上・中流部（川に入りちゃんかけ拾い体験）
→三島梅花藻の里
- 12:00 昼食
- 13:00 三島市民活動センター
- 13:30 源兵衛川再生に関わった関係者ヒアリング
- 14:30 ①行政関係
宮崎 眞行様（三島市産業振興部 部長、当時企画調整課担当者）
- 15:30 ②協力企業
小浜 修一郎様（遊水匠の会代表、当時三井住友建設静岡支店長）
- 16:30 ③協力市民団体
越沼 正様（源兵衛川を愛する会事務局長、当時は市民）
小松 幸子様（グローバル文化交流協会元代表、三島ゆうすい会副会長）
山口 東司様（源兵衛川沿い・南本町高台町内会長、当時市民）
- 17:30 ④協力専門家
加藤 正之様（地域環境プランナーズ代表、当時源兵衛川設計業務担当）
菅原 久夫様（常葉大学非常勤講師・富士山自然誌研究会代表、当時源兵衛川自然環境調査（植生植物）担当）
- 18:00 夕食
- 20:00 源兵衛川ホテル観賞（徒歩）

平成25年6月15日土曜日

09:30 三島市周辺の調査

- ①松毛川（千年の森づくり、竹林伐採活動等）
- ②函南さくら保育園ビオトープ（園児対象の環境教育の実践地）
- ③三島南高ビオトープ（里山生態園構想地見学）
- ④中郷温水池（源兵衛川の最下流部）

12:00 昼食

- 13:00 ⑤せせらぎシニア元気工房（間伐材を活用したものづくり、
環境コミュニティ・ビジネスの拠点）
- ⑥三島街中カフェ（街中のにぎわい再生拠点）

15:00 全体総括・質疑応答（三島商工会議所）

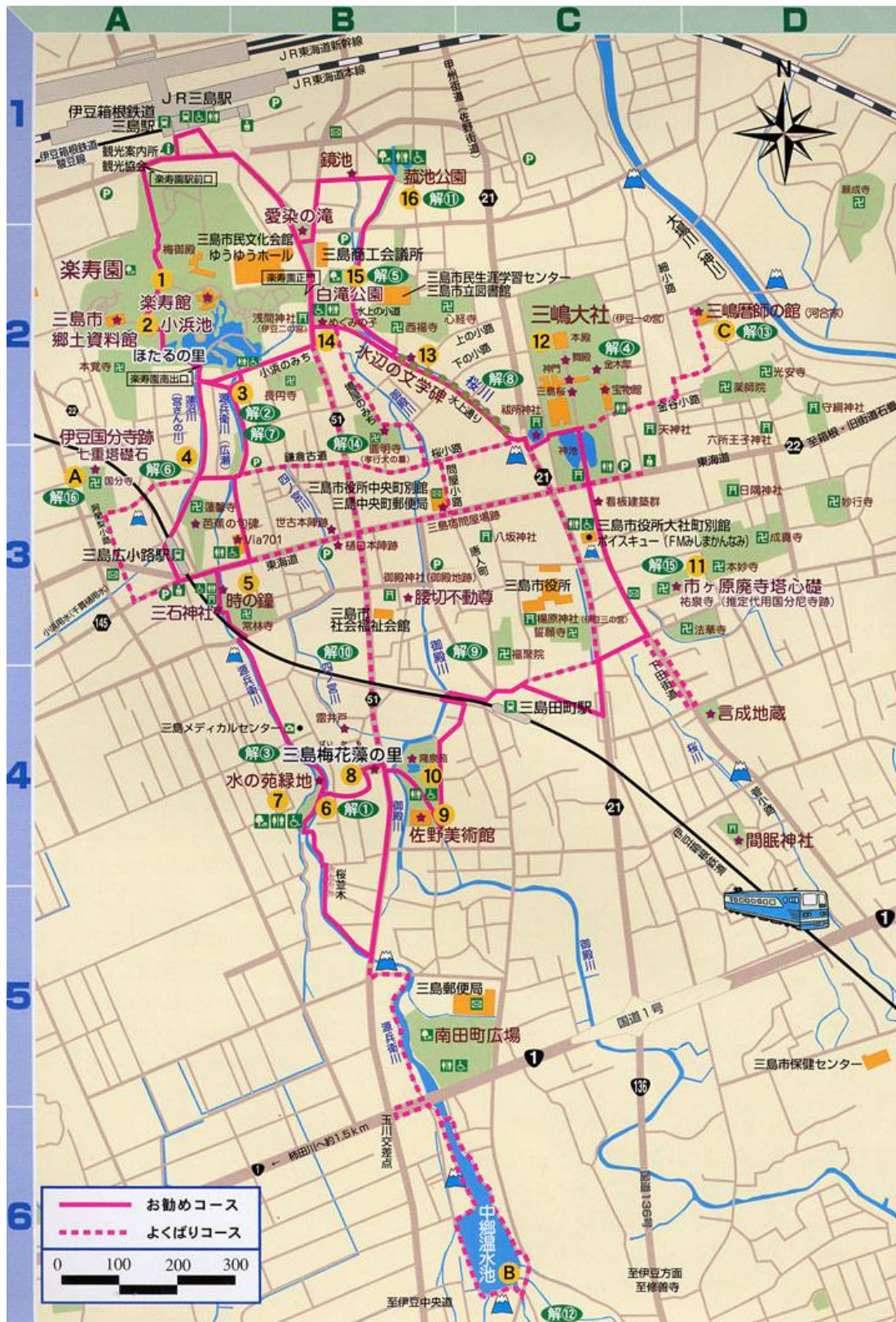
渡辺豊博（NPO法人グラウンドワーク三島専務理事・事務局長、
都留文科大学教授）

17:00 解散

参加者 阿久津正志 大川淳子 佐藤穂貴 榊原 功
鈴木 健司 高橋邦明 田中清治 長崎 玲
農端 康輔 三浦忠司 雪下伸明

写真提供 特定非営利活動法人グラウンドワーク三島
大川淳子 雪下伸明 GW三島村上茂之

三島駅・源兵衛川周辺地図



三島商工会議所作成の「みしまっぷ」を活用

現地調査プレ講義報告書

日時：平成 25 年 5 月 13 日(月) 午後 6 時 30 分より

場所：弁護士会館

ヒアリング先：NPO 法人グラウンドワーク三島専務理事・事務局長、
都留文科大学教授 渡辺豊博様

参加委員：田中清治、鈴木健司、高橋邦明、大川淳子、長崎玲、雪下伸明、
佐藤穂貴、農端康輔、榊原功

報告者 高橋邦明

1 源兵衛川とは

三島駅の南に楽寿園がある。楽寿園は富士山から約 30 km 離れている。富士山では、年間 3000 ミリの雪雨が降るが、降った雪雨が地下水となって湧き出てくるのが、楽寿園の小浜池である。

他にも富士山からの地下水は、菰池、白滝公園などにも湧き出ており、昭和 30 年初旬ころは 1 日 40 万トンの量があったと言われている。

いろいろな場所から湧き出てきた水は、三島市内を毛細血管のように縦横無尽に流れていた。

その中で代表的な川が源兵衛川である。源兵衛川は、小浜池付近から始まり、三島市の中心市街地を 1.5 km 流れ中郷温水池で終わる川である。

三島市の人口は約 11 万人で、そのうち三島市の中心市街地に居住する住民は約 5 万人、源兵衛川の流域に居住する住民は約 2 万人である。

源兵衛川の他にも、四ノ宮川、御殿川などが流れ、昔から三島市は水の都と呼ばれていた。

終焉の中郷温水池周辺には、約 300 ヘクタールの水田があり源兵衛川の水は農業用水として平安時代から利用されている。

源兵衛川は、かかる農業用水路として掘削されてできた川で、農業用水として水を温める必要性から川は蛇行し川幅は広く水深は浅くなっている。

昭和 30 年代中ごろ以降、三島市も高度成長の波にもまれ、上流に大きな工場が建設され大量の地下水がくみ上げられ、水田が潰され、人口の増加による水利用量が増えていった。

その結果、どんどん水が減少していき、特に冬場は水が枯れてしまい、下水が流れ込んでドブ川化して悪臭を放つようになった。

2 源兵衛川がドブ川化した当時の関係者の意識

今から20数年前、源兵衛川がドブ川化した当時の住民には、自分たちで源兵衛川をきれいにしようという意識はほとんどなかった。

住民は、源兵衛川が汚くなったのは行政の責任だ、行政が何とかすべきだと主張し自らは何もしなかった。

NPOや市民団体は、お互いに自分たちが正しいと言い合いをしていた。

水をくみ上げている東レに対し、操業を停止しろ、水のくみ上げをやめろ、条例を制定して水のくみ上げをやめさせればいい、それができなければ訴訟だという対立にもっていくという強硬的な意見ばかりであった。

そのような状況下で、市民・企業・行政のパートナーシップにより問題を解決することを目標にグラウンドワーク三島を設立した。

市民・企業・行政がパートナーシップを組もうとしても、その間に調整役がいないと機能しない。グラウンドワーク三島は、その調整役としての役割を担おうとした。

そして、市民も行政も企業も皆が利益を得て解決できる仕組みを考えることを目標に活動を始めた。

他のNPOや市民団体から、当時も今も、グラウンドワーク三島に対し、行政から補助金をもらったり、企業から協賛金をもらって問題を解決するとは何事だ、グラウンドワーク三島は行政や企業に魂を売った、手下だなどと脅迫まがいの電話がかかってきた。

しかし、従前のNPOや市民団体のように、行政や企業と対立構造をつくっても問題は一つ解決しなかった。

グラウンドワークとはイギリス発祥の運動である。サッチャー首相当時のイギリスでは、財政難から様々な社会問題を解決することが困難であった。

そこで、市民と企業、行政がパートナーシップを組み、それぞれが知恵を出し合い、3分の1ずつの責任をもって地域社会の問題を解決しようという枠組みができ、三者の調整役としてグラウンドワークを設置し問題を解決しようとするものである。

イギリスでは、グラウンドワークは問題解決に貢献し、グラウンドワークUKは予算が237億円、職員が2400名おりイギリス政府から予算の70%の補助金を受けて活動している。

我々は、日本で初めてイギリスのグラウンドワークを導入したものである。

グラウンドワーク三島のモットーは、「右手にスコップ、左手に缶ビール」「考えるよりアクション」「走りながら考えよう」で、頭で考えるのではなく実践主義、現場主義、ボトムアップを基調にしている。

3 「水の都・三島」の原風景



昭和30年代初旬の源兵衛川は水深が2メートルほどあり、水を満々とたたえた川であった。

現在は、水深が多い時でも10cmほどしかない。

そこで、活動の基盤として、水の都三島の原風景の再生と復活を掲げた。

(特定非営利活動法人グラウンドワーク三島提供)

昔は、源兵衛川沿いには川床式の料亭が並び、船が浮かび情緒あふれる水辺空間であった。

昔は子供たちは源兵衛川を始め周辺の川でいつも遊んでいた。そのような環境を、子供や孫たちに体験させる伝えるということは物質偏重の現代社会にとって重要である。

これらの原風景がわかる当時の写真を市民から募集した。

今の子供たちは、物質的に豊かでインターネットや受験勉強の知識はあるが、故郷のことは知らない。故郷のことは知ること、故郷の問題が何であるのかをきちんと知ることが重要である。

4 ドブ川化した源兵衛川



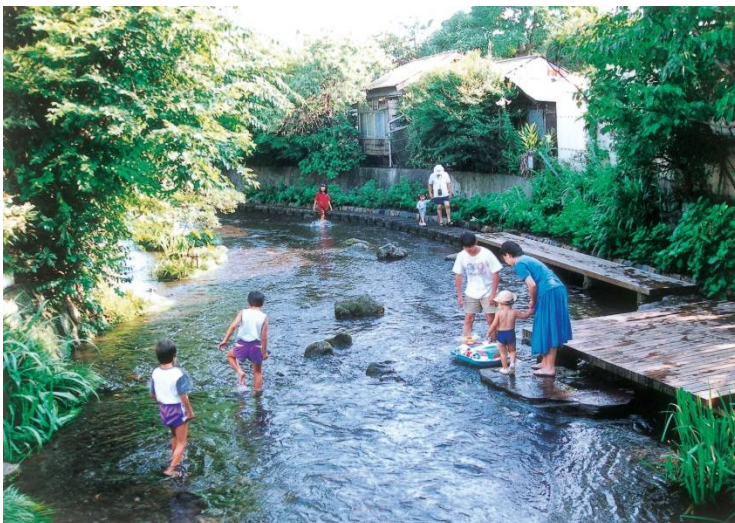
(特定非営利活動法人グラウンドワーク三島提供)

そして、源兵衛川の清掃を始めたが、源兵衛川の底にはヘドロがたまって長靴が沈むほどであった。川底からメタンガスが発生して、一緒に清掃していた子供が倒れて2回も救急車で運ばれたこともあった。

大人は、子供には環境が大切だと言いながら、自らは過去、現在ゴミを捨て環境破壊をしていた。清掃を始めて1年数カ月たってようやく差し入れをしてくれる人がいたが、それまでは2、3人しかゴミ拾いをしなかった。

毎年環境戦略を作成して実行し、毎年見直しして再度実行するという手順を踏んだ。この環境戦略の作成実行が功を奏した。

5 再生した源兵衛川



(特定非営利活動法人グラウンドワーク三島提供)

上記写真と同じ位置から、1980年代に撮影した写真である。

源兵衛川の底にはヘドロが堆積し、湧水も湧いてこず悪臭を放っていた。

当時は、源兵衛川を暗渠化し蓋をして親水公園にしようという計画があったが、元に戻そうということになった。

現在の源兵衛川である。三島駅からわずか7分の近さの三島市中心街にある。

毎年5月、6月にはホテルが乱舞するまでにきれいな川に復活した。

水辺では子供たちが水遊びをし、大人たちが憩いの場として利用している。

源兵衛川の水は東レから協力を得て、一定の水量を流してもらっている。観光客も多く来訪するようになり、きれいな「水の都・三島」が復活し活性化しつつある。

魚やサワガニもたくさん棲んでおり、バケツ一杯ほど獲れる。子供たちは一度獲った魚やサワガニをバケツから手に取って、「お風呂へ入れよ」「また来いよ」と話しかけながら逃がしてやっており、情緒教育からも多大な貢献をしている。

6 共通・共有の認識等の重要性

誰でも同じ人はいないので、各人が頭の中に描いている事実関係には齟齬がある。

これを共通化し、共通・共有の認識をもつことが合意形成のはじめである。グラウンドワーク三島では、源兵衛川の危機を知ってもらうため、数年に渡って200回以上源兵衛川周辺の住民を対象に説明会を開催した。

このようにコーディネート力、フットワークの軽さは行政にはできない。科学的な専門的な知見をもって説得するのも重要な方法である。

NPO自身が地域の中に入っていく、地域の信頼性を得ることが重要であり、認識の共有は必要なことである。

また、情報の収集・分析も重要である。どのように考えているのか、どのような解決方法があるのか、総合的な解決方法は何かを随時検討する。

運動を継続し、成果を集約することも重要な事項である。

環境マネジメントも重要である。土地を購入するのか、賃借するのか、契約書をどうするのかなどマネジメントもしなければならない。

マネジメントの視点から弁護士が入って契約を締結するとか、交渉するとか、法的な判断をするなど弁護士の役割は大きい。

そして、グラウンドワークは、「潤いのある街から うるおいのある街へ」をスローガンにした。

その意味は、源兵衛川をきれいにすることできれいな水で潤う街になることで、多くの市民の意識が変化し、多くの観光客が来訪して、経済的にも潤いのある町にしようというものである。

実際に、源兵衛川が再生されたことで、三島市で一番大きい商店街には空き店舗がなくなった。

多くの観光客や市民が集まることで、経済的にも利益を得られるようになっている。

グラウンドワーク運動も地域社会の問題を解決するという点で、和解や調停と似たようなところがある。

そのような多数当事者がからんだ状況下で、どの辺を落としどころにするか、どのように説得するかなどのは、弁護士の業務としても類似性があり、弁護士が活躍できる場でもある。

7 社会的企業について

NPOや市民団体は、資金面、財政面でかなり厳しい。

NPOの収入減を検討しても、寄付金、協賛金、補助金、助成金などで行政の助成金などに依存しなければ活動ができないのが現状である。

しかし、社会にある問題を解決するにあたって、NPOが果たす役割は大きなものがある。

企業は、営利活動を目的とするため資金面では比較的余裕があるが、社会的な問題を解決することは本業ではない。

行政は、人的な制約があることに加え、財政的にも余裕がない。

社会にある問題をビジネスの手法を用いて解決しようとする社会的企業が現れ、イギリスでは大きな市場を形成するに至っている。

例えば、イギリスのナショナルトラストはイギリス政府から補助金等ももらっていない。寄付金等を始め、グッズの販売などビジネスをして収益をあげて、環境保全などの社会問題を解決している。

これと比較し、日本のNPOは、寄付金程度しか収入減がなくボランティアがせいぜいで、これではたいした活動はできず若者も寄り付かない。

そこで、グラウンドワーク三島では、ビジネス的な手法を取り込んで、営利事業、非営利事業を区別し、営利事業で収益をあげて、収益を非営利事業にあてるといふ、寄付金、補助金に依存しない、持続した活動を可能とする事業を始めている。

ボランティアでは責任の所在も曖昧であるが、ビジネスになることできちんとした雇用体制、勤務制度を採って活動ができる。

ビジネスとしての事業活動であるので、法規制の有無、解釈、交渉と合意形成、契約書の作成などで弁護士が活躍できる場は大きい。

グラウンドワーク三島では、平成22年度、23年度に内閣府から10億円の事業費を受けて、社会的企業の育成、社会的起業の支援事業を行い、延べ3000人を超える応募者を教育し、100を超える社会的起業を支援した。

平成24年度は、復興型の社会的起業家の育成、社会的起業の支援事業を行った。

イギリスでは、グラウンドワークの所長が会社をもっていて、社会にある問題を様々なビジネス手法を用いて解決し、所長クラスで年収1000万円ほどの収入がある。

例えば、廃校となった高校跡地が売春宿、麻薬の密売所となった場所があった。そこをグラウンドワークが入り、高校を老人向けのデイサービス、保育所に改造し、夜間はパブ、運動場にして照明をつけることで収益をあげながら売春婦や密売人が寄り付かない場所にした事例がある。

日本では若者よりは、知識や経験があり資金面、時間にも余裕があるシニアこそが社会的起業家として向いているのではないかと考えている。

社会にでて起業をしようとする様々な人とのあつれき、トラブル、契約関係など問題が発生する。

一度事故や問題が発生すると、善意で活動してきた人々は離散してしまい、NPOや市民団体は継続せず責任問題のみが残ってしまう。

そのようなNPOや社会的起業家に弁護士がアドバイスすることは非常に重要で、弁護士の活躍が期待できる。

逆に弁護士など法曹家こそが、現場に入り底辺で仕事をすることによって、より知見を深めることができると考えている。

NPOは、社会の問題に真正面から取り組み、現場の最前線で活動しているので、弁護士などがNPOで6か月や1年でもいいので、一生懸命働くことも重要な意義があり、現にイギリスでは多くの法学部の学生、弁護士が過酷な現場で経験を積んでいる。

以上

源兵衛川周辺の調査報告書

日 時：平成 25 年 6 月 14 日(金) 午前 10 時より
場 所：三島駅→鏡池→菰池公園→白滝公園→街中カフェ
→楽寿園・小浜池→宮さんの川・ほたるの里→源兵衛川上・中流部
(川に入りちゃんかけ拾い体験) →三島梅花藻の里
ヒアリング先：NPO法人グラウンドワーク三島 小松幸子理事長、村上茂之氏
参加委員：田中清治、高橋邦明、阿久津正志、雪下伸明、佐藤穂貴

報告者 雪下伸明

視察の目的

源兵衛川の再生その他、グラウンドワーク三島（以下、「GW三島」という。）が整備に取り組んだ実践地を視察し、行政と企業・住民・NPOの協働による大きな効果で、豊かな水辺や生態系が復元され環境が改善された現況を見る。三島駅南口から徒歩にて各所を回る。



①10:10～ 鏡池

溶岩でできた池。かつて湧水に満ちていたが、1960年代以降、地下水の過剰消費により枯渇。

GW三島が整備し、平成6(1994)年、「鏡池ミニ公園」として開園し、手入れを続けている。

富士登山をする前に禊を行なった場所と伝えられている。



②10:18～ 菰池・・・周囲を含めて菰池公園となっている。

桜川の起点で、かつて湧水豊富であったが、今はポンプアップを行なっている。

桜川へも、生涯学習センター5階の雨水を貯めて入れるなどして



いるとの事。

定期的にゴミ拾い等の手入れをしているため、きれいである。

③桜川を下り、白滝公園に至る。桜川の川沿いは石畳の道になっている。



④白滝公園・・・1万4000年前の溶岩に覆われた公園。けやきの木が多く、根に溶岩がまとわり付いている。

園内に平井源太郎の「農兵節」の歌碑あり。

楽寿園正門並びのGW三島運営のショップ2店を見学。

1号店・・・「三島街中カフェ1号店」・・・有機野菜、惣菜等を販売

2号店・・・三島街中カフェ2号店「ZEROGO-ME」(0合目)・・・婦人向けの洋服、化粧品等を扱う



⑤10:35～ 楽寿園へ入園。

明治時代に小松宮彰仁親王の別邸として造営され、現在は三島市が管理する約2万2000坪の自然豊かな公園。1万4000年前の噴火で流出した三島溶岩流の岩盤の上にある。



⑥10:41～ 楽寿園内の小浜池へ。

源兵衛川の源流部。かつて満々と水を湛えていた池であるが、今は枯れて真ん中辺りに水があるのみで、底の溶岩が露出している。

池の向うに見える建物は楽寿館であり、一般公開されている。

付近に東レからの取水管(土管)あり。



⑦10:43～「宮さんの川・ほたるの里」へ。

蓮沼川（通称宮さんの川）の上流部に水を流し、人工的なせせらぎを作り、ゲンジボタルが成育できる水辺環境を作った。

「宮さん」とは、かつての楽寿園の所有者小松の宮のこと。

宮さんの川は防火用水用に堰き止めてあり、ボウフラ発生のを、鯉を入れた。カルガモの子が生まれていた。



⑧10:55～ 源兵衛川流域の散策を開始。

源兵衛川・小浜池を水源とし、中郷温水池まで流れる全長 1.5km の農業用水路で、生き物探しや水遊びが可能。東レからの一次冷却水を入れている。夏場は多くの親子連れでにぎわう。環境省「平成の名水百選」に選定。

ホトケドジョウ（静岡県レッドリスト絶滅危惧 1A 類・県東部、環境省レッドリスト絶滅危惧 1B 類）やゲンジボタルなど、清流を好む魚類・水生生物が多数生息する。



⑨ 源兵衛川の「カワバタ」が再現されている箇所へ…「カワバタ」とは、かつて川岸の家で川に段を作って洗い場とし、洗濯等に利用したもの。

2枚の写真を掲げ、源兵衛川の以前と現在の状態を比較している。



⑩11:00～ 第2ゾーン・川の中の散策路「水の散歩道」を歩く。所々に湧水が出ており、飲んだ人もいた。



⑪11:10～ 第3ゾーン（「せせらぎ源兵衛」～蓮馨寺沿い）へ

流れが急になる箇所があり、そこは川の道を設置していない為、階段を上って道路へ出る。



⑫11:17 旧東海道（大通り商店街）を渡って三石神社へ。時の鐘あり。

11:20～ 三石神社沿いの源兵衛川（第3ゾーン）でちゃんかけ（茶碗の欠片）拾いを開始。かつて川に茶碗等を捨てる風習があつて今も陶器の破片が残り、その清掃をする。

サンダルを借り、ズボンの裾を捲って川に入り、瀬戸物のかけらなどを拾う。

11:35 ちゃんかけ拾い終了。



⑬11:40～ 伊豆箱根鉄道の線路を渡り、階段を下りて「水辺の散歩道」を行く。

三島梅花藻（ミシマバイカモ）が見られる・・・川の中の藻の塊のような水生植物、白い梅に似た花を沢山付けている・・・ホトケドジョウの生育の為の水辺づくりの一環としてGW三島が植栽し育てた。



⑭水の苑緑地へ・・・第4ゾーンにある湧水の池と林から成る親水公園。カワセミがいるとの事だが、今日は見られなかった。カメラマンのマナーが悪く問題。





⑮11:50～ さらに下流へ行くと、ミシマバイカモの手入れをしている山口東司様（南本町高台町内会長、GW三島インストラクター）が登場し、苦勞話を語る…ヌク取りの掃除を年に300回行なっているとのこと。



⑯12:05～ 三島梅花藻の里を見学

ミシマバイカモの育成地、園内に水車や井戸がある。環境悪化により一度は市内から姿を消したミシマバイカモを復活すべく、増殖基地として整備。行政からは整備のための補助金、企業からは溶岩パネルのサンプルの提供を

受け、GW三島のスタッフ等で整備。

柿田川からバケツ数杯のミシマバイカモを譲り受け、市民ボランティアによる毎週1回の整備作業により手入れを行ない、1年中白い花が見られる。数年前から、増殖したミシマバイカモを源兵衛川に移植している。

これにて実践地視察終了。

以上

源兵衛川再生に関わった関係者ヒアリング報告書

～行政関係～

日 時：平成 25 年 6 月 14 日(金) 午後 1 時より
場 所：三島市民活動センター第 2 会議室
ヒアリング先：三島市産業振興部長 宮崎眞行様
参加委員：田中清治、高橋邦明、阿久津正志、大川淳子、雪下伸明、佐藤穂貴

報告者 佐藤穂貴

事前に送付した質問および当日の質疑について、以下のように回答があった。

1 汚れていた当時の源兵衛川について

源兵衛川が汚れていた当時、行政である三島市には源兵衛川についての苦情が当然寄せられた。目の前のごみが汚ければ住民たちは待つてはくれない。「何とかしてくれ」と言われるが、アクションを起こす人は少ない。苦情や陳情としては、「水を流してほしい、ごみを無くしてほしい、美しい景観にしてほしい」というものだった。特に「綺麗な、湧水に近い水を流してほしい」という要望だった。8 団体で組織するグラウンドワーク三島（以下「GW三島」という。）が立ち上がる前に、その前身団体から要望があった。

源兵衛川は農業用水のため、農業施策としての重要な意味があり、田んぼに引く水が必要だった。当時の市の組織体制としては、河川の管理をする土木課と農業用水の管理を担う農政課が担当部署であり、私が所属していた企画課はコーディネート役を果たした。

2 源兵衛川に関する規制等について

源兵衛川に関する規制は、何もなかった。中郷用水組合が水利権を有していたため、行政としては、彼らのためにどれだけ水を流せるかが重要だった。まずは河川、農業用水にどのように手を付けたらよいかを考えた。

当時は源兵衛川へ下水が流れていたが、これを契機に流さなくなった。ただし、下流部の一部に今も流入している箇所があり、今も交渉が続いている。

汚れた源兵衛川に対し行政だけでは対策がとれなかったため、GW三島の前身の市民のみなさんと一緒に計画づくりから始めた。三島市の特性として、

水と緑の際立った快適な空間、つまり「水の都」と言われたイメージを市民が皆持っていた。それをどう実現していくかが行政に与えられた役割だと考えていた。

源兵衛川に関しての部署の連携は、市の農政課と県の東部農林事務所が中心に行なった。東レの冷却水を流してもらう交渉に際して、当時は市からは助役が、中郷用水組合からは理事長が東レにお願いした。しかしそれでは物足りないとの東レの見解だった。そこで、民間も一緒になり是非お願いしますと申し入れて、今のような状態に持っていった。既に動いていた県の事情はわからないが、三島市は県について行き、快適な水環境整備を行なおうとしていた。

3 源兵衛川再生へ向けた合意形成について

源兵衛川再生プランについては、県の東部農林事務所の当時の担当だった渡辺豊博さんが、いろいろなところからプロをつかまえてきて、関わってきた人のニーズ、行政の対応、人の思いをうまく伝えることができた。もし、県の職員が設計していたとすると果たして今のような日本に誇れる、皆が素晴らしいねという源兵衛川になっていたかは、疑問だ。

事業の具体的なプロジェクト名、予算、工事内容、実施期間などについては、お配りした当時のパンフレットのコピーを参照してほしい。

本件の源兵衛川再生プランは、たまたまいたキーパーソンである渡辺さん、そしてGW三島の前身のゆうすい会が発案者だった。そして、GW三島に参加した当初の8団体が加わっていた企業、市民団体だった。そこに集められた強力なスタッフが、市民とのワークショップを経て、行政や組合も参加して、再生プランを作成した。

一番重要な役割分担については、東レが水の供給を確約してくれた。市民団体は川沿いの市民とのコーディネートをしてくれた。県と市は実施に向けてそれに動いて行った。それに対し市民からは反対運動等は起こらなかった。というのも、GW三島の人が前もって説明に歩いて思いを伝え、アンケートを取った時も昔の源兵衛川のノスタルジーをあおるような質問をした。情報と目的について、行政と民間団体が同じ方向を向き常に共有していた点が挙げられると思う。

公共事業を進めるにあたって、制約や障壁となったのは下水や農業用水の問題で、行政は利用者との話し合いを行なった。これらの解決にあたっては、「この手法をやったらどうだろう、一度やってみようよ」、と皆が思いながらやった。平成4年当時、全国でもこのようなやり方は珍しかったと思う。

再生後の生態系の復活については、東部農林事務所の地域プランナーであ

った加藤正之さんのアドバイスが大きかった。源兵衛川で環境整備重視の整備をしなければ、今のような景観と環境にマッチしたものは作れなかったと思う。その結果、実際に源兵衛川に生態系は復活した。ホタルも自然発生している。トンボの種類も多くホトケドジョウも生息している。

源兵衛川に対して、市から市民や企業に向けて事業計画を説明する際に留意しているのはGW三島と中郷用水組合だ。

源兵衛川の再生について、市議会でも当然賛成が多い。反対意見は、中心市街地ばかり何でやるのか、という意見があった。それに対し、当時からコンパクトシティの発想があり、まずは中心市街地から再生しないと郊外に拡げられないと説明した。ただし、予算規模を20億円から13億円強に減らす等して少し気を遣った。

4 源兵衛川再生後について

三島市は環境先進都市をめざしている。今は「ガーデンシティ」という品格のある都市を目指している。これは、ごみがない、きれいな状態に整備、管理していくという意味だ。

源兵衛川の再生後に、再び川が汚れたことはある。工事の際に油が流れたことや、民間の自動販売機からの油漏れもあったと聞く。また、市民が鯉やマスを川に放して、生態系がくずれることがある。ホタルについては、市は観光資源として積極的に使いたい。また、自然発生しているというのがそれを育てたい反面、そういう状態を保つためには、草をぼさぼさにしないといけない面もある。それについて、地域住民によっては汚い、虫が出る、ごみがつかえてたまる等の苦情が出る。そのため、市としてはGW三島に対し、管理するならばちゃんと管理してほしいとはっきり伝えている。約束事を守ってもらうことにより、行政との信頼関係が保たれる。

三島市への観光客は、源兵衛川が再生した後、何百倍にも増えたと思う。観光案内所によると10倍程度だが、もっとあるだろう。三島には昔は楽寿園と三嶋大社しかなかったが、今は「協働の町」とシンボリックにまちづくりが全国的に評価されている。そういう意味でGW三島の活動は非常に大事だと思っている。

源兵衛川の再生後は良い影響が多い。人が町を相当歩いている。また市民がそういう町だと理解してくれている。GW三島が協働のまちづくりのシステム、概念、理念を作ってくれたのが非常によいと思う。まだ足りない点として、地域住民と現在の状況についての議論がもっとなされてもいいと思う。役割分担について、もっと地域住民とコミュニケーションしてもいいと思う。

源兵衛川の再生の波及効果もあった。まず、源兵衛川の発想を意識して、

山田川の自然の里、ふれあいの里を既に作った。そこでは有機農法を民間主導、地元主導でやった。また、「協働」という言葉をあらゆる面で市民も行政も多く使うようになった。ただ、取り違えて発想している人も多い。まず、情報や計画を共有し、役割分担が働いて初めて協働といえる。このことを理解してもらうには、民間の人たちが実践して教えるしかない。

5 現在のまちづくり等について

源兵衛川再生後も、行政、企業、そして市民団体、NPO法人との協力体制は続いていくと思う。市役所へ入ってくる新人も、GW三島や源兵衛川のコラボレーションが良くて来た、という人が何人もいる。インターネットの情報等を見て三島市以外からの応募も多くなっている。

三島市のまちづくりや産業振興に関して、行政と企業、市民団体、NPO法人が協力して達成した施策の一番は、当然、源兵衛川だ。場合によってはいくつか挙げられるのだが、実はなかなか難しい目をつぶっている問題もある。行政指導を考える際に、私は民間が何をやりたいかを常に中心に置くようにしている。そのときその団体がなぜそれをやるのか、それをどう支援することが三島市のためになるのか、ということが重要だと思っている。たとえば、松毛川が汚くてなんとかしたいという話がある。浚渫費用の工面やサンクチュアリの道路建設を考えている。農政課の基盤整備によりサイクリング道路ができないか等を、GW三島と協力しながら進めたい。

三島市として、産業振興と自然環境の保全の両立をどのように図っていくかは、一番大事なことだと思う。この2点は両輪で、さじ加減が難しい。基本的にはまち、住宅、里山がある空間をつくりたい。ところが、今は東駿河湾環状線ができて箱根が近くなった。東名から伊豆にはすぐに行けてしまう。そのため三島市は中心市街地をコンパクトに作り替えていかなければならない。そうすると、三島に来て住んでもらうための仕掛け、特に三島に住んで働いてもらうことが重要だ。そのときに、自然とどう調整するかを考えるのは、市や市長の考えることだろう。

また、これからは小さな市役所になると思う。これは持論だが、人数を減らして専門化して役割をNPOや企業に担ってもらっていきべきだろう。逆の考えをしている人もいるが、そうではないだろう。実務は民間にやってもらったほうが良い。行政がやっていることで、民間でできないことはたぶんないと思う。分業化は可能で、その中で道しるべをすることが行政の役割だろう。海外視察に行くと、行政の職員は専門家になっている。同じ方向を向いて役割分担がはっきりしていれば、将来的には日本でも民間と行政の人材交流はありうると思う。今から三島市の特長を伸ばして、「日本でも三島市は

特別だよ」、という存在になるのがいいと思っている。

6 質疑応答

Q 1 実際に小さな役所になりつつあるのか。

A 1 行政改革の一環で、かつては 1000 人以上いた職員が今は 800 人だ。その分仕事が多くなったとは思わない。委託や指定管理者、補助金でいろんなことをこなしてもらい、役割を担ってもらっている。予算規模は昔に比べれば大きくなっているが、伸び方は大きくない。

首長にはハードにこだわる人もいるが、それをしてしまうと後々の負担に困る。空港や大きなコンベンション施設を建設すると維持管理が大変だ。P F I を利用すること等は見直されてもよいと思う。

7 最後に

私の個人的な考えとして、GW三島の組織、システムも非常に大事だと思うが、それ以上に私はGW三島の気持ちを大事にする。当初GW三島に参加していた人たちの熱気はすごかった。「少しずつ三島市を変えていくぞ」という思いは凄かった。今はシステム化が進み過ぎている感もある。原点回帰をしなければ前進はないと思う。私が好きだった熱かった人たちの集まりのスタッフ会議、そういうものは時代が変わっても若い人が入ってきて、行政を打ち負かすほどの熱気が出てくるといいなと思う。

組織が法人化し説明責任が発生すれば、弁護士等の専門家の果たす役割も必ず出てくると思う。GW三島は今のところネームバリューがある人が多いため、ネットワークで解決しているのかもしれないが、こういう機会を期に利用も考えられると思う。

以上

源兵衛川再生に関わった関係者ヒアリング報告書

～協力企業～

日 時：平成 25 年 6 月 14 日(金) 午後 1 時 55 分より

場 所：三島市民活動センター第 2 会議室

ヒアリング先：当時三井住友建設静岡支店長 遊水匠の会代表 小浜修一郎様

参加委員：田中清治、高橋邦明、阿久津正志、大川淳子、雪下伸明、佐藤穂貴

報告者 佐藤穂貴

1 経歴、グラウンドワーク三島に関わるようになったきっかけ

私は住友建設株式会社に勤務していた。トンネル土木を担当し、企業戦士として全国津々浦々裏を回っていた。年間 2 週間くらいしか三島市に帰って来なかった。1960 年代は 3 K と言われ危険な作業の長時間労働をしていた。労働条件はきつかったが、働けば働くほど給料は上がった。家を早く買った人はローンが安くすんだ。今でいう環境破壊は進み、金を積んで用地買収していた。青天井で残業をしていたが、だんだん規制されて減ってきた。

当時、ボランティアについては、無償奉仕とみられていた。社会貢献という考えはなかった。経営者は当時、社会貢献は利益の 0.2% を寄付することだけだと考えていた。1990 年代に半ドンになった。そのころ私は現場部門から管理部門の事務職に変わった。休みがぼっと増えたので、何をしたらよいかわからなかった。会社にはいられず、家にいてもやることがないため、三島市内を歩き回ってみた。

そのとき、たまたま三島ゆうすい会を知った。当時の源兵衛川は発泡スチロールも浮くどぶ川で汚かった。私は三河の出身だから、小川との暮らしに親近感を感じた。どぶ掃除みたいなことなら自分でも手伝えると思った。源兵衛川はごみ捨て場や洗濯干し場が面している、暮らしの裏側で見えない場所だった。しかし、昭和 30 年代の水がこんこんと湧き出ている写真を見せてもらい、これなら俺にも役に立てると思って、会社名は伏せて個人で参加した。

2 当初の活動

当時はちゃんかけ拾い等をした。私はよそ者で郊外に住む団地住まいだっ

た。川掃除をしている人は近場に住んでいる人が多かったので、私にはなかなか声をかけてもらえなかった。知り合いがいないから声を掛けてくれる人はおらず、溶け込もうと思ってこちらから話しかけた。当時、水曜日に大学の先生などを招いて、勉強会をやった。

東レとの交渉で水を流してもらえるようになった。当時、ボランティアをやっている建設会社の人、私以外だれもいなかった。私が部長になったころに本社からいわれた、「あのバカボランティア部長」と言われたことは忘れない。当時、会社から何をいわれるか、給料を下げられるかなど、危険な意識があった。だから、会社名は明かさず内緒にしていた。

私は飛ばなくなったホタル、絶滅したミシマバイカモを再現するのが目標だった。ある時、川の護岸を整備しようとしたとき、私は土木業なので得意だった。曲がった木を使っても何十本も杭を打つことができた。名前を伏せていたから、「あのんだれだ」ということになった。渡辺さんからそのうちバレていった。会社に対しては、そのうち居直っていた。これは自分だけの思いだけでなく三島市の思いとしてやっていた。酒を飲むとよいアイデアが出てきた。

3 活動に対する周囲の変化

20 数年やってきて、会社の経営者の考えも変わってきた。当初は某建設会社K氏、と新聞に記載された。そのうち住友建設という名前が入るようになり、当時全社で新聞切抜き記事になったのは私が一番多かった。このように名前が出るようになってきて 10 年くらい経った時、特別社長賞をもらった。これは、農林省OBの副社長が気づいたからだった。渡辺さんと農林省にいったとき、数日後、副社長からどこで酒飲んできたのかと怒られる電話が来た。副社長は農林省に褒められたそうだが、そういうときは事前に俺に言うもんだ、という話だった。これだけの情報発信をしたら広告宣伝費としてどれだけの効果になるか、といわれ賞をもらった。

4 活動の進め方、内容

金がないときはコラボレーションだ。金をなるべくかけずしてやるか。企業や小さい団体が何かやりたい時に、どうしたら企業からうまく物を引き出せるか、アドバイスする支援体を作った。

絶滅したミシマバイカモをもう一度源兵衛川に戻そうという運動があった。育苗の場所が必要になり、埋められてしまう予定だったマスの養殖場を使うことになった。これも建設企業の力があって、実現できた。あそこにある石は、御殿場でのダム工事の石を使った。下請け会社にとって重機も一日使っ

て運搬した。木の型枠を多めに発注してステージも作った。私にはわさび田をつくったノウハウがあったため、それもいかした。

三島ゆうすい会やグラウンドワーク三島（以下「GW三島」という。）のアクションの企画にはお金がかかったので、そのために地元企業に行くのとたかり屋と思われて、話にならなかった。ところが、企業には倉庫があり、そこは宝の山だったことに目を付けた。割れてしまったU字鋼などB級品をもらったり、重機を借りたりした。そのうち、日曜日だったら手伝ってやるよ、といわれたらしめたものだった。当時は、ボランティアというのとたかり屋だと思われていた。10 数年前はGW三島の認知度は小学生の間で 20 数%だった。そんなものかと、正直ショックだった。今は幼児への環境教育などもやっているため、認知度はもっと上がっているだろう。また、工房でも活動している。芋ほりなどもしている。おそらく、市民の6、7割はGW三島を知っているだろう。いろいろな活動の積み重ねが効果があった。公園への表示などでイメージアップを図り環境教育をしている。20 団体ある団体が個々に様々な行動を行なっている。

企業は、はっきり言って今は大々的には何もやっていない。お金を出せないからだろう。イメージアップについては、今から 10 年前は盛んに行われたが、今は儲からなくなったので出費しなくなった。建設業や製造業は、一般市民からお金を集めることはできないので、自腹を切るか従業員が汗を流すしかない。若手に聞くと、個々にはボランティアに参加できるようになったが、会社からNPOにお金を出す気はないだろう。GW三島でも、企業からお金をもらうのは厳しくなっている。ごみ拾いなどをする人は増えてきているが、ごみ拾いもばかにならない。若者が今何を飲んでいるかよくわかる。それを楽しんでやっていた。ゆうすい会の活動も、皆が楽しんでやっていたので、ついてきたのだと思う。

5 質疑応答

- Q 1 以前の渡辺さんの勉強会で印象に残っているのは、かつての三島市のきれいな水辺の体験があったからだ、と聞いた。小浜さんのお話を聞いていても、三河に原点があったと伺った。そうすると将来をみたときに、今の若者には原点と言えるものが無いだろうがどうなるのか。様々な団体をみても、年配の人が活発な場合が多い。将来が心配だが、どうなるだろうか。
- A 1 自然とたわむれることの楽しさはいつの時代でも変わらない。ただ、その機会がどれくらいあるかだ。子供にいろいろ体験させてあげることが重要だ。腹が立つのは、今 40 代の子供の世代で、孫に対してだめだ、失格。愚痴ばかり言っても仕方がないが。そこで、「じじ育」で、孫を直接教育する

しかない。ディズニーランドや脂っこいものを食べさせていてもしようがない。自分らが子供に対し直接教育できなかったことが祟っている。だからGWでも幼稚園児や小学生をターゲットに教育を盛んにしている。

Q 2 GW三島から企業に対し、直接協力を仰いだことはあるか？参考になる事例があれば教えてほしい。

A 2 企業も金もうけだ。メリットのないことはやらない。ボランティア活動することで会社に何が貢献できるか。一番の意味は、社員の意識改革だ。横とのコミュニケーションができるようになった。ごみ拾いをするのは皆平等だ。上下の格差が無くなりコミュニケーションが進んだのがメリットだ。企業は最近協力をしてくれない。何がいいかというと、GW三島にはメディア力がある。それに企業が乗せられれば参加してくれるだろう。そして乗った企業をいかにフォローするかが大切だ。感謝状を贈るだけでも、企業としては嬉しいものだ。使いっぱなしで終わると、1、2回の協力に終わってしまう。企業の気持ちを乗せないといけない。共同でなく協働にしないとけない。

Q 3 40代に対し期待できないとの話があったが、環境教育が問題なのか？それとも、その世代固有の問題があるのか？

A 3 環境教育については、昔は仕事が忙しく、せいぜいできて組合が催した川でのバーベキュー程度だった。泥とたわむれるような教育は当時、僕たちはできていなかった。給与の査定のポイントになるためにいやいや来ていた人が多く、それではだめだった。環境教育をできていなかったから子供たちには想いが無い。僕らの場合は、昔のきれいな状態、汚れた状態、と同時に人間も腐りきってしまったのを見ていたから想いがある。孫への教育はひとつの輪廻だろう。教育の大事さは強く感じる。

Q 4 東レの技術を利用して、もっと水をもらうようにできないのか。

A 4 上流には東レだけでなく、ベスロンやヤクルトもある。それらももっと金を出してくれてもいいと私は思う。東レはある意味我々の恩人でもある。

6 最後に

しめくくりとして、物事を進めるには想いとアクション、情熱が大事だ。この指とまれと指を出せばみんな集まってくる。熱き想いがあると来た人が感動し、賛成する。年寄りに昔の思い出を語らせて、感動を引き出す。それが我々の手法だった。それを何度も繰り返した。 以上

源兵衛川再生に関わった関係者ヒアリング報告書

～協力民間団体～

日 時：平成 25 年 6 月 14 日(金) 午後 3 時 15 分より

場 所：三島市民活動センター第 2 会議室

ヒアリング先：源兵衛川を愛する会事務局長 越沼 正様

グローバル文化交流協会元代表、三島ゆうすい会副会長、

NPO 法人グラウンドワーク三島理事長 小松幸子様

源兵衛川沿い・南本町高台町内会長 山口東司様

参加委員：田中清治、高橋邦明、阿久津正志、大川淳子、雪下伸明、佐藤穂貴

報告者 高橋邦明

1 越沼正様からのヒアリング内容

私は、三島に 60 年以上住んでおり、東海道沿いの商店街で 25 年ほど飲食店を経営し商店街活動も多々してきました。

私は、この 60 年の源兵衛川の良い時、悪い時、復活した時を知っています。

1960 年初めまでは、三島市の子供たちは源兵衛川で泳いで育ったが、その後保険所から源兵衛川からかなりの大腸菌がでたとのことで遊泳禁止となった。しかし、当時は水量はかなりあった。

高度成長期の 1960 年代後半に入ると源兵衛川の水量が冬に水が枯れるが、夏になると水量が増えるということを繰り返すようになった。

1970 年代、1980 年代には源兵衛川に水はなくなってしまった。

1980 年代は下水道の整備も進んだが、源兵衛川沿いの住人は整備費がもったいないとして下水をそのまま源兵衛川に流していた。

水が流れない源兵衛川に下水が流れ込みヘドロがたまるようになって源兵衛川はドブ川化していった。

現在の源兵衛川の中にある散歩道には、当時ヘドロがたまるという状況にあった。

水が枯れる冬場は、ヘドロがたまるまでは自転車で源兵衛川を走ることができる状況であった。しかし、ヘドロがたまるにつれ悪臭がひどくなった。

夏場の5月から10月には水量が増えたが、これは東レが水を源兵衛川に流していたこともある。

1980年代は、水量が増える夏場は、源兵衛川を一時的に堰き止めて酸素を送ってアユやマスを放流して手づかみ大会などの催し物をした時期もあったが、冬場は水が流れずドブ川化しヘドロ臭い川であった。

当時の商店街は、当時不足していた駐車場を確保するため、ドブ川化し悪臭を放っている源兵衛川を暗渠にして悪臭を防ぎ、暗渠の上を駐車場にすることを考えたが、金額が巨額であったため暗渠化の構想は立ち消えとなった。

ドブ川化し悪臭を放つ源兵衛川に対し、住民からは中郷水利組合は何故何もしないのかと苦情を言い、中郷水利組合は住民に対し、住民が下水を流すからヘドロがたまってドブ川になったと苦情を言い、三島市は両者の間に挟まれて何もできず、三すくみの状況にあった。

平成の初めころ渡辺さんより、源兵衛川をきれいに整備したいという話があり、源兵衛川の整備事業が始まった。

その関係で、三島の湧水を復活させようという話が出、三島ゆうすい会が設立され、私も参加した。

その活動のなかで、まずは源兵衛川をきれいにしようということになり、有志を集めてゴミ拾いを始めることにした。

ゴミ拾いを3月から始めたが、3月の源兵衛川は東レが水を流す前のヘドロの状況であった。ゴミを拾えばきれいになるという単純な発想で始めたが、ヘドロのドブ川では、悪臭の中ゴミを拾うのではなくゴミを剥がす作業の繰り返しであった。

周囲からは、やめたほうがいい、もの好きだとか、元になんか戻らないなどとさんざん言われた。

源兵衛川でゴミを拾っている最中に、川岸や橋の上からゴミを源兵衛川に投げたり、タバコの吸い殻を投げ捨てられることもあった。

それでも、有志は毎月1回必ず集まってもくもくとゴミ拾いを続けた。

ゴミ拾いを始めた翌年には、源兵衛川を愛する会を設立して、三島ゆうすい会と協力してゴミ拾いを続けた。

ゴミ拾いから3年経ったとき、今までやめたほうがいいのか、もの好きだねとか言っていた人が、良くやっているね、頑張っているねと褒めてくれる

ようになった。

そのうえ、源兵衛川にゴミを捨てる人が段々減っていった。

そして、ゴミ拾いから5年が経ったとき、生態系が戻り始め源兵衛川の風景が変わり始めた。

そうすると益々ゴミを捨てる人が減り、逆に源兵衛川に入って何かをしたという人が増え始めた。

東京の旅行業者に頼んで源兵衛川のゴミ拾いツアーを企画してもらったところ大盛況で、かなりの人にも手伝ってもらったこともあった。

このころ住友建設静岡支店長であった小浜様もゴミ拾いなどに参加するようになって、小浜様はどんどん元気になって、会社の方からボランティア部長などと言われていたが、他の社員も次第に熱心になっていき会社からも賞賛され取締役にもなった。

小浜様は、定年退職後はボランティア活動に専念しようと考えていたが、会社から引き留められ、今度は会社としてボランティア啓発活動をして欲しいと要請されるまでに至った。

私が商売をしていた商店街も衰退していったが、私は源兵衛川をきれいにするだけで商店街が活性化するし、三島市も活性化するという信念でゴミ拾いをしていった。

ゴミ拾いによって、どんどんきれいになっていく源兵衛川を住民が見て、住民の意識もどんどん変わっていき、ゴミを捨てなくなったり、ゴミ拾いに参加したりするなどどんどん変化していった。

源兵衛川の再生については、綿密な協議がなされた。

源兵衛川の整備事業の前までは、前述したように、住民と中郷水利組合は互いに苦情を言いあい、三島市も何もできない三すくみの状況にあった。

その状況下、整備のための工事の前に、3年ほどかけて、住民、企業、行政との間のわだかまりや要望の調整など助走段階に大きな重みを置いて活動した。

当時県庁で勤務していた渡辺さんは、中郷用土地改良区の理事長を説得するのに3年かけたが、組合員は整備事業に反対はしないが協力もしないという立場であった。

渡辺さんは、自治会や住民を対象にした集会を何度も開催し、源兵衛川をこうしたいという提案をして、理解と協力を求めた。

上流部分である100メートルの工事を始める際にも様々な反発があった。例えば、皆さんが歩いた源兵衛川の中の歩道の設置について、中郷水利組合は、歩道によって水流が変わるなどと苦情を述べていた。

それに対しては、様々な実験を行って歩道を設置しても水流に影響ないことがわかり理解してもらった。

周辺の住民からは、源兵衛川の中を人が歩くことによって夜泥棒が入ってくるのではないかと、源兵衛川沿いの家屋の台所は炊事洗濯のため源兵衛川に向けて作られていたため、源兵衛川を歩く人に台所を見られてプライバシーを侵害するなどという苦情まであった。

これらに対しても目隠しを設置するなど対応をすることで理解してもらった。

しかし、20年経った今、プライバシーの侵害を訴える住民は一人もいなくなった。源兵衛川を歩く人から、良いところに住んでいますねとかいい家ですねとか言われるようになって、逆に目隠しなどを撤去していかに良く見せるかという考え方に変わった。

昔は悪臭を放つ源兵衛川の近くに住みたくないなどと言っていたのに大きな変化である。

橋をひとつ作る場合であっても、近くにカワセミの巣があることから、いかにカワセミに影響を与えないかという視点で架橋の必要性の有無、場所の選択などが検討されるようになった。

現在まで、市民に対し、ゴミを捨てないでなどというアピールをしたことはない。

ゴミは落ちていれば拾えばいいという発想で活動しており、ゴミを捨てないでと働きかけることはなかった。

昔は、20軒以上の家屋の下水が、源兵衛川につながっていた。市役所が下水道につなげるように言っても補助金がでるならつなげてもいいという返事であった。

しかし、現在は、源兵衛川に下水をつなげている家屋は1軒もない。これは源兵衛川に下水をつなげていると恥ずかしいという気持ちがわくためである。

市役所が上から言ってもダメで、市民がきれいにしている源兵衛川につなげたくないと思うことが肝要である。

私は、商店街の活動も多々やってきました。商店街が衰退してきたときも、どうやったら商店街が活性化できるかよく協議しました。東京のどこかの商店街のようにギリシャ風の街並みしようとかいろいろな話があった。

しかし、今は源兵衛川が復活したことで多くの観光客が来て、商店街は活性化しています。私がいた商店街は400メートルほどありますが、空家屋はひとつもない。空がでると直ぐに別の店が入る状況である。

まさに源兵衛川が商店街を三島市を活性化させたのもので、某上場会社の社長も川の再生で商店街が活性化したというビジネスモデルはきいたことがないと言っていた。

当初は成果があがらないなか、私は、20年くらいやれば何とかなるだろう、月1回程度のゴミ拾いであれば苦にならないだろう、ゴミが捨てられるなどして元に戻ってもまたゴミを拾えばいい、これ以上汚れることはないという気楽な態度で活動をしてきた。

何故20年かという時代が変わるには少なくとも20年はかかるだろうと以前から思っていたからである。

私は、東京の大学をでて三島に帰ってきたが、東京にはないことをしようという気概もあった。

このような気楽な態度で活動してきたからこそ長続きしたのだと思う。今でもゴミ拾いの後の一杯や無駄話が面白い。

こういう方針や雰囲気は自然にでてきたものである。

人の入れ替わりはあるが、我々は組織ではなく運動体と考え、運動体を継続しようという意識で活動してきたのが成果につながったと思う。

2 山口東司様からのヒアリング内容

私は、三島生まれの三島育ちで71歳になる。源兵衛川沿いに住んでおり、家の前に流れる源兵衛川で繁殖している三島梅花藻を育てており、町内会長を務めている。

昔の源兵衛川は水量が多く、家の前の橋から川に飛び込むことができた。

昔の源兵衛川には、アユ、マス、ウグイなどの魚が住んでおり、コイはいなかった。コイはきれいな水の川にはあまりいない。コイは水が汚れたり流れがあまりないところに住んでいる。

昭和33年に大きな台風がきて三島市も大きな被害を受けた。その年に東レが三島にきて昭和36年からフル操業を始めた後から一気に水量が減り、冬場は長靴で入れるようになった。

富士山の雪が溶ける5月ころから再び水量が増えるようになった。

昭和5年（1930年）の北伊豆大地震で三島が全滅したが、その際楽寿園の小浜池で発見されたのが三島梅花藻（ミシマバイカモ）である。

しかし、昭和36年以降の水量の激減によって、三島梅花藻は絶滅し、その他ゲンジボタル、ホトケドジョウも絶滅した。

ホトケドジョウは、普通のドジョウより小さくヒゲが少ない。

三島梅花藻は静岡県レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類である。

本日チャンカケ拾いをしたが、チャンカケとはお茶碗のカケラのこと、昔はゴミの分別という意識はなく、ガラスや瀬戸物などの捨て場所に困った昔の人が源兵衛川に投げ捨てたものがたまっただけである。

何故大量にたまっただけという理由は、源兵衛川は500年ほどの歴史がある農業用水路であるところ、三島市では葬式の後、亡くなった人が使用していた茶碗を川に流すという風習があった。

昔は、源兵衛川の水量が多かったので流れていくと思われていたのではある。

私は、南本町高台町内会長をしており、町内会などのゴミ拾いのボランティアをしている。

私は、以前から環境やエネルギーなどの問題に興味があり、自分の周辺の問題として、自ら率先してゴミ拾いをすることで周りの人も動くのではないのかと思って活動している。

三島梅花藻の育成について研修を受けて実践している。現在で9年間続いている。三島梅花藻は、汚れに弱いためほぼ毎日梅花藻についての汚れを取り除くなど、三島梅花藻を育てるために毎日大変な作業をしている。

後継者がなかなかいないのが悩みである。周りの人からは、素敵ですね、すごいですね、頑張っていますねと言われている。

源兵衛川の再生で三島がきれいな街になった。観光客も多くきており源兵衛川を歩いてきた観光客からきれいですねと言われることが、私のモチベーションである。

以前このようなことがあった。家の前の橋の近くに90歳代のお年寄とその奥様がきて、お年寄りが、「ここはきれいだね、この三島梅花藻は日本一だね」と言って記念撮影をした。

そのあと、お年寄りが、「こんなきれいな梅花藻を見たから、もう死んでも

いいや」と言ったところ、奥様が「こんなきれいな梅花藻を見たからこそ長生きしてね」と言って帰るのを見た。

私は、ボランティアで1年365日頑張っているが、私が育てている三島梅花藻が、いろんな人に元気を与えていることに生甲斐をもっている。

3 小松幸子様からのヒアリング内容

源兵衛川の再生によって復活したホテルをもとに、三島市では毎年ホテル祭りを開催している。三島ゆうすい会がホテルにちなんで俳句を募集したこともあった。ここでは三島ゆうすい会10周年記念誌に掲載された俳句を紹介したい。

午前歩いた源兵衛川を思い出しながら俳句を堪能して欲しい。

俳句には、 蛍火、初蛍、蛍籠など蛍に関連した言葉や、水辺たどる、水より暮れるなど、水辺に関連した言葉も出てくる。きれいな源兵衛川とホテルを題材にした俳句がたくさんある。

私は、グラウンドワーク三島の他、三島ゆうすい会や『バイリンガル環境かるた』を作成したグローバル文化交流協会などに参加している。

どの会も個性的な人が多く楽しい団体ばかりである。

本年残念だったのは、かつて楽寿園の所有者で、グラウンドワーク三島の理事長をしていた緒明實様が亡くなったことである。

緒明様は、楽寿園の危機を救った人であり、昔から大変お世話になっている。私にはグラウンドワーク三島の理事長として何ができるのかいつも考えている。

グラウンドワーク活動は、イギリス発祥の活動で、グラウンドワーク三島は、今年で設立20周年を迎えた。今後もネットワークの形成、様々な団体等のつながりを重視していきたい。

私は、「思い」が大変重要だと思っている。私は、三島に視察にきた大使館の方とメールのやりとりもしているが、ヨーロッパの国の大使館の方で名前が現地語で「心」を意味する人がいた。

その人は、何か行動を起こすときには必ず自分の心に聞いているとのことであった。

三島でのボランティア活動は、越沼様が言われたようにあまり頑張らないことも重要である。

しかし、毎日手を抜かず一生懸命ボランティア活動をしている人も多くいる。

このように各自が自らのペースで活動できること、各自ができることには限界があることを認識すること、必ず出席しなければならないなどの制約がない緩やかな結びつきであることが、長続きの理由ではないかと私は考えている。

各世代によって、源兵衛川が汚かったことを知らない人や、汚かったのがきれいになってびっくりした人などがいるが、今の子供たちはきれいな源兵衛川を見ているので、みんなで協力をして今のきれいな源兵衛川を維持していきたい。

以上

源兵衛川再生に関わった関係者ヒアリング報告書

～協力専門家～

日 時：平成 25 年 6 月 14 日(金) 午後 5 時 10 分より

場 所：三島市民活動センター第 2 会議室

ヒアリング先：当時源兵衛川設計業務担当

地域環境プランナーズ代表

加藤 正之様

当時源兵衛川自然環境調査（植生植物）担当

常葉大学非常勤講師 富士山自然誌研究会代表

菅原 久夫様

参加委員：田中清治、高橋邦明、阿久津正志、大川淳子、雪下伸明、佐藤穂貴

報告者 雪下伸明

私がお話しすることは、グラウンドワーク三島（以下「GW三島」という。）が出版した書籍「アクションで大展開」の中の第 2 章「パートナーシップでの源兵衛川の再生」に載っています。この部分の小目次をお配りしました。これに沿って話をします。

1 加藤正之様からのヒアリング内容

私が三島と関わるまで

私は東京で建築設計事務所を経営していますが、1989 年秋に、偶然源兵衛川の再生事業に関わることになりました。私は建築の仕事をする中で、建築単体からまちづくりの分野へ進みたいと考えていました。

かつてリゾート計画の時代がありそれにも関わりましたが、なぜか大企業が進出して大きな施設をつくっても、地元にあまり利益が落ちない構造であることがわかり、リゾートはいやだなと思いました。そこで 30 代後半から、本業の他に東京のまちづくり設計事務所に半分関わり、その仕事を手伝うようになりました。

80 年代前半は「地方の時代」と言われましたが、資本主義経済上はプラスになりません。そればかりやっていると経済は良くなるから元の工業や商業中心に戻ろうという流れが常に働くのです。政治経済も住民のためとか自然重視とか言いながら、従来の商工業へ戻ってしまうのです。

日本はここで経済の大転換を考える時期に来ているし、結論を先に言うと、法律家の皆さんもそうした方向への世の中のシステム作り、法制度作りで協力してもらいたいという話をしたいと思います。

私と三島との関わりは、先に述べたまちづくりの設計事務所に打合せに行っていた時、静岡県庁農政部の役人の渡辺豊博氏から電話があったことに始まります。この事務所は「都市環境開発センター」といいますが、昭和50年代半ばに、国土庁の水緑都市モデル事業の調査事業の策定をしまして、渡辺氏は県庁職員として、それを見てこの事務所に頼もうかなと連絡してきたのです。当時のそこの部長が私に、「やってみる？」と言うので「是非やらせて下さい」と引き受けました。

かつて三島には2度来たことがあり、水が豊かですばらしいと思いました。しかし、かつて私が来たのが水の多い夏だったようで、改めて来てみるとヘドロの川でした。

こうした縁で、1989年から三島に来て24年間ずっと関わっています。

源兵衛川再生—初の住民参加型

源兵衛川の計画・設計・工事には9年かかり、1500メートルの川を整備しました。建築、土木、造園の専門家で設計グループを編成し、設計しては工事することを繰り返しました。

この源兵衛川再生は住民参加型で、このような生態系、地域性を重視し、将来の住民による維持管理までも考えた事業は、それ以前は存在しませんでした。「アクションで大展開」の本には「専門家集団は自由な発想と旺盛な探求心によって未知の分野を切り開いていき、大小の課題を乗り越えていった」と物語風に書きました。

源兵衛川再生には、①川の生態系を豊かにすること、②住民参加で行うこと、の2つの趣旨があります。当時、ヨーロッパではドイツ、スイスを中心としてビオトープ思想や自然を生かした水辺づくりをする近自然河川工法が、農村計画の中で行われていました。他に英国を中心とした住民参加システムがあり、こうしたものを参考にしました。

農業土木、一般土木での住民参加は初めてで、単に住民向けの説明会をするのではなく、工事の計画段階から住民参加で地域の要望を聞くもので、日本で初めての試みでした。

三島で住民参加が成功した背景

次に、なぜ三島で住民参加がうまくいったかの背景を、私の考えで説明します。大分歴史をさかのぼりますが、まず、

- ①1955年に沼津三島コンビナート計画が策定されました。これは通産省が推進した巨大計画で、石油化学は大量の冷たい水を必要とし、企業は水を求めて進出することから計画されました。4つくらいの企業が進出を計画しましたが、工場立地後は駿河湾からの西風に乗って煙や熱風が運ばれるため、三島の植生が大きな影響を受けるとして住民と専門家が猛烈に反対しました。彼らは当時公害が発生していた四日市や水島のコンビナートに見学に行つて実態把握もしました。こうした反対運動により、この計画は頓挫しました。

この話は公害学者の宮本憲一氏『地域開発はこれでよいか』（岩波新書）に紹介されています。日本の公害史上、環境史上重要なことです。次に、

- ②1977年の五所平之助監督の映画「わが街三島」は、三島と湧水の関係を描き、豊かな水の都三島がこんなに環境が悪化しているのかと問題提起しました。そして、

- ③1980年に国土庁水緑都市モデル地区形成事業の計画が立てられました。これは全国9都市につき、水辺や緑地を整備し、レクリエーション施設を造るというもので、この計画書を見て渡辺氏が私に頼んできたのです。

こういう流れがあり、結局、住民の「声なき声」が底流を流れていて、水の都三島を取り戻したいという強い意志があったのだらうと私は解釈しています。

源兵衛川再生の開始

④1989～農業水利施設高度利用事業

源兵衛川流域は、農林水産省の「農業水利施設高度利用事業」の一環として「源兵衛川親水(しんすい)公園事業」の事業が始まりました。先ほど言いましたように、私は偶然のきっかけで、この源兵衛川再生に関わることになりました。

農業水利施設とは、源兵衛川などの用水路、ため池、分水施設などです。

「高度」とは、上流から下流へ水を運ぶ目的のみでなく、川沿いの景観を良くし、生物がたくさん住めるようにし、人々が遊び楽しむ場所として利用することを意味します。農業用水路は効率だけを考えれば、コンクリートで固めて流すのがいいかも知れません。

しかし自然の水路が本来持っていた浄化能力を生かせば、川周辺の環境が良くなるからホタルも出る、人間も元気になる、となります。

私は人間の再自然化が必要だと考えます。今の都市化の中で、子供が自然に触れずに成長することを私は危険だと思っています。人は知識の詰め込み

ばかりをするのをやめて、生き物らしさを取り戻すべきです。「右手にスコップ、左手に缶ビール」というのが GW 三島の活動のスローガンですから。

次の小目次は、「3 三島における人と水との関わり」ですが、今お話しした経過の通り、三島では、川で洗濯し、野菜を洗い、水と一緒に暮らしをしてきたので、水が無いと自分らしさ、三島らしさが無いと心の中で思っていたという底流があって、GW 三島の活動が活性化したのだと思います。

合意形成に至るまで

次の小目次は、「4 合意形成とパートナーシップ」です。

合意形成をいかにしてやったかですが、まず静岡県東部農林事務所が三島市にこういう事業をしたいと提案し、最初に農業用水路整備計画策定懇話会を作りました。

住民への説明会では、1500メートルの源兵衛川を今後どうするかということの説明するのに、A1サイズの大きな紙を10枚くらい貼り合わせた源兵衛川の計画図を会場の壁にずーっと貼って、住民や議員さん、行政の方々に見せました。住民の感想は、今はヘドロ、ゴミ、自転車、テレビが捨ててある川がこんなにきれいになるのか、という感嘆でした。絵にすると皆さん喜んでくれます。

しかし合意形成は簡単ではありません。

まず渡辺氏が県庁職員として土地改良区に入り、3年くらい色々動きました。私達はそのあとに出て行くことになります。

渡辺氏の苦労話はあとで聞かれるかと思いますが、百何十回も打合せをし、酒を飲んで下地作りをしたことか……。

土地改良区の人たちの反応は、川をきれいにして観光客が来ると川を汚すだろう、だから川を触ってもらいと困るというものでした。しかし、当時も汚い川のまま水を通すとヘドロが田んぼに行ってしまうため、土地改良区の人たちは田植え前にヘドロさらいをして毎年500万円も使っていたのです。

そんな事をするより、川をきれいにして啓発活動をして、住民がゴミを捨てないようにし、川は住民に愛され、水はきれいなまま流れ、川の管理費は大してかからない、こういう構想を立てようじゃないかと、渡辺氏が土地改良区と話をしました。

これが合意形成の70～80%を占めると思います。

その他、計画策定時に先進水辺地域を視察しました。岡山市の街中の農業用水路を整備した所や郡上八幡に行きました。いいところを見ることで自分たちもやりたくなるのと、費用を掛けて見に行ったからには元を取ってやろうという気持ちになる効果があったので、先進地視察は良い手法だと思いま

す。

パートナーシップの形成

次にパートナーシップをどう組んだかですが、計画策定懇談会を上流、中流 2 箇所、下流の 4 箇所で行い、また川沿いの人たちに、

- ・源兵衛川にどんなイメージを持っていますか
- ・子供のころ川でどんな遊びをしましたか
- ・今お子さんは川で遊んでいますか
- ・どんな風景ができたらいいと思えますか
- ・掃除に参加していただけますか

といったアンケートをしました。

こうした計画段階からの住民参加により、住民の意見を計画に反映し、それを目の前に実現させることが大事です。住民は、「おれの言ったことを聞いてくれた。だからこの川をきれいに保っていこう」という意識を持ってくれます。

源兵衛川再生の原則

こうして源兵衛川の上流から毎年 200 メートル区間ずつ合計 8、9 年かけて工事を進めましたが、最初に計画の原則を打ち立てました。

まず生態系は、当時の静岡大学教育学部教授で生態系復元が専門の杉山恵一氏が担当しました。90 年当時は、まだ生態系を「保護する」という考えが強かったのです。すなわち道路を造るな、何々をするなという運動で、結局道路などは作られてしまい敗北感を味わうこととなります。

これに対し杉山氏は、一度失われた生態系を「復元しよう」、源兵衛川を以前の水の多い美しい川として住民、専門家、役所、企業の連携で復元しようと考えました。そこで、1 つは流域に良好な自然生態系を復活させることを目標としました。

原則の 2 つ目は東京農大の進士五十八教授による、源兵衛川のアメニティデザインです。

すなわち、川沿いに三島らしい安らぎのある空間を作ることを原則とし、

- ・作りすぎずさらりとシンプルに
- ・材質は地域固有の素材を用い溶岩を基調に配していく
- ・全域を統一的に作る
- ・川の構造物は用途に応じて最小限の必要なるものしか作らず、用の醸し出す美を追求する…例えば護岸は溶岩を積んだものとし、橋はシンプルなものとする

- ・五感に訴えかけるようなランドスケープデザイン
 - ・なるべく全域に遊歩道を通すことを目的とする
- という原則を立てました。

工事が始まって

こうして最上流の川の道を作ったところ住民から喜ばれ、下流域も早くやってくれという要望が出てきました。初めは、川沿いの家はプライバシーを心配しましたが、川がきれいになる方がよいというふうになり気持ちが変わっていきました。川沿いに居住していた当時の石井市長は完成を喜び、近所で子供の歓声が聞こえ、地域一帯が明るくなったと歓迎していました。

住民意識の変化

源兵衛川整備を始めて 2 年目、湧水の多い年に水量が増えて川の道が水没するということがありました。設計ミスではないかとの声が上がったため、市役所はあわてて石の道の上に木道を作ってしまった。

しかし私としては、水が多いことを単純に喜ばばいいのにと、木道工事に反対したのですが…。三島は 7 年に一度水が多くなるといわれていますが、次に水が多くなった時は誰も文句を言いませんでした。これは勉強会を重ねて住民の環境意識が高まったためです。

こうして 1990 年代に 10 年かけて工事は完成しました。

1990 年代—市民活動の進展—その背景

一般に 90 年代は失われた 10 年と言われますが、市民活動はかなり進展しました。

95 年頃までの環境運動は生態系にまで意識が回らず、川沿いにコンクリート構造物を作って人が川に近づけるように整備するが主流でしたが、90 年代後半から生態系復元の動きが始まり、川沿いに緑を増やすという思想に変わりました。

これはヨーロッパのビオトープ思想の普及が影響しています。特に学校ビオトープの普及が大きいです。つまり、校庭は運動できればいい、という考えから、緑が多く、水辺があつてトンボが来たりする心安らぐ校庭が良いという考えが普及したのです。

95 年の震災後、子供の心を癒すため、関西の小中学校でビオトープを沢山作りました。土の所に水を流したり池を作るだけで、どんどん緑が増え生物も集まって来ることで、子供の心が癒されます。

いま東北の被災地でも、がれきの所が春になって緑が増えて、心が安らぐ

ということもあります。住民にとっていかに緑が大切かということがわかります。

川辺のデザインとは

川のデザインとは何かということですが、我々も環境思想の変化とともに学んでいるので、川の護岸に壁画を飾るといったことではなく、自然を豊かにすることを基本としたデザインとは何かを考え始めました。こういう時代の変化があり、三島市民も付いてきてくれたのが有難いです。

たとえばこの5ゾーンは、昭和50年頃まで料亭がありました。生け簀があって、鱒や鯉がいたり、それが川に逃げ出したりしていました。1990年頃は、ここに水のサロンという建物を作る計画をしていました。しかし、環境思想の変化と我々の考え方の変化もあって、構造物は作らず、自然を豊かにすることに統一しました。

これは説明会の時に住民のみなさんの意見を聞いたら、近所の女性が「あの吉野水苑のあたりは公園みたいにしないで下さいね。草がぼうぼうしている方が、ここには似合う。」と言ったのです。じつは当時市役所は、水辺を埋めて舗装して防災公園にしたいと考えていたのですが、私たちはそれに疑問を持っていましたので、この女性の意見も市役所に伝え、今のような緑の多い水辺が残りました。

このように合意形成には苦労しましたが、比較的うまくいったと思います。

次の小目次5「川の自然と人間の共存」ですが、これまでの講義で聴いたと思いますので省略します。

小目次6「暮らしの水辺」のデザインですが、これもある程度お話ししたと思います。

三島住民のこだわり

102 ページの 6,4「専門家・住民・行政の協働」、この協働したことのメリットについて説明します。

一番下流の温水池はとくに生態系を重視して設計しました。ただの広い水面より、島があって、細い水路や太い水路で水の流れが変化することにより生態系が豊かになるので、今よりも島を沢山造ることを計画しました。

しかし温水池は三島で一番大きな池で、島によって三島名物の「逆さ富士」が見えなくなるという住民の意見があったため、最終的に島を減らすことにしました。

また当初、川の一番上流ゾーン1で、川の道の右側に溶岩礫を入れて水の浄化水路にしました。その際、黒い溶岩が無く、赤い溶岩を使用したところ、住民から猛反発を受け、ジャンボ（渡辺）さんもずいぶん怒っておられたのですが、以後注意するという事で勘弁してもらいました。

私達は、三島の住民は地域に非常にこだわりを持ち、地域らしさを大事にしたものを作りたいという希望を持っていることがよくわかり、それ以降は特別に気をつけて設計監理をするようにしました。

その他

次に104ページ左上 わさび田の断面構造が載っています。

今は源兵衛川に雑排水は入っていませんが、90年代に完成した時は台所や風呂場の生活排水が入っていました。これを川の中で濾過しようと考え、中伊豆町のわさび田を見に行ったところ、溶岩積みを流れ落ちる清流が非常にきれいだったので、その濾過システムを採り入れました。これも地域らしさの1つの表現だと思います。

また、本の中の四角で囲んだところに「プライドオブプレイス」の説明がありますが、これはその土地に長く住む住民は地域に誇りを持っている、それを保全または復元するという形で整備しないと、住民から愛される施設にならないというイギリスの思想です。

イギリスでの取り組みの歴史

次に他の本からの引用がありますが、中島恵理さんという環境省の行政官で、イギリスに3年間滞在し、イギリスの持続可能な地域作りを調査してまとめた本から抜粋しています。イギリスでは約100年前からナショナルトラストの活動が始まりました。工業先進国として、失われつつある海岸の美しい景観を守ろう、歴史的建造物を守ろうとして出来た団体です。

ナショナルトラストは寄付で買い取って維持管理して国民に公開し、入場料をとれるという法制度になっています。

50年前からはシビックトラストが始まり、これは買取はせず、地元で美しい景観や町並みを守ったり改善したりするものです。

そして30年前からグラウンドワークトラストが始まりました。両者の比較が載っていますが、シビックトラストはきれいな環境を守ることに重点を置くのに対し、グラウンドワークトラストは荒廃した環境を回復することに主眼がおかれています。環境改善から始まり、今は地域の福祉、雇用など、まちづくりを広く捉えて活動しています。

現在日本では、都市から遠く離れた農山村などで「限界集落」という表現

を使いますが、イギリスは「衰退地域」と呼んで、環境が悪い、失業者が多い、不良少年が多いといった衰退地域の原因の除去および再生に取り組んでいます。興味のある方は後で読んでいただきたいと思います。

次の「市民主体のアジェンダ（課題）21」、イギリスはそういうことをパートナーシップでやっていくことで行政一辺倒より効果があるだろうとしてやっています。英国の取り組みは毎年のように改善されるところがすごいです。

144 ページに「英国の地域政策の大転換」とありますが、イギリスは新しい民主主義の仕組みを導入して、地方行政がどんどん転換されています。日本はイギリスより 25 年遅れで今そこに到達したところだと思います。

まちづくりードイツの景観制度

まちづくりに関しては、英、独が参考に採り上げられますが、アメニティとは景観のみでなく、安心してそこに居られるということです。昔から継承されたものがそのままあることで、それが人の心の支えとなり、長くそこに住み続けたいという地元への愛着心が生まれます。

次にドイツの景観制度を説明します。

これは、①広域計画と、②地区詳細計画から成っています。

地区詳細計画は、ここにはこういう建物、○階建てまで、壁面は○メートル後退、道路の位置は、などと建築条件を細かく決めておき、それでいいという人が土地を買って建物を建てます。計画時に住民が集まり、ああしろ、こうしろと口を出します。だから建築が不自由なのです。勝手に建物を建てて商売を始めたら村八分になるとまで言われています。

一方、日本は建築行為が自由すぎて、金さえあれば自由に建物を造れます。日本では、住民の心の中にある風景とか、街はこうあってほしいという声に対して法的には答えてくれません。

私は、日本でもアメニティ法（住民がその地域で心地よく暮らせるためのアメニティ向上を目ざす法律）を作れないものかと思います。法律が人の心の中にまで入り込むのはいけません、単に物理的規定で「これは認める、これは認めない」ではドイツのような所まで到達できません。

子供の心をどう守るか

極端な例ですが、ある中学校の校庭の隅に大きな木があって、女子中学生が友達との語らいの場としてその木陰をいつも利用していたのですが、道路拡張で木が切られてしまいました。そうしたら、その生徒は木を切られた悲しさでしばらく失語症になってしまったのです。

この問題、法的に何とかならないのでしょうか。

国連にこども憲章がありますが、子供の純粋な心を大人はどうやって守るかということは非常に大切です。大人になればその木は大事でなくても、子供にとっては大事だということがあります。子供の純粋な心、自然を大切に思う心、ふるさと意識などを守ってくれる法制度はできないものでしょうか。小さな事だが大切なことがあると思います。

終わりに

6時になったのでこれで終わります。質問等ありませんか。

ちなみに、このホワイトボードに貼った図表は、1991 から 92 年にかけて源兵衛川の全域で生態系調査をした時の動植物の一覧表です。工事の最初に、高等植物、鳥、淡水魚、昆虫など、どこに何がどれだけいるかを調査し、工事が終わった後 1、2 年後にまた調査します。生物相の減退がある時は、工事の仕方が悪かったのではないか、などと検証します。

工事が完成した後、小学校の子供が一度に数十人来て遊びに来て、川の生物相がダメージを受けたこともあります。

川掃除をするとき、ゴミを拾うのはいいが、植物をみな雑草扱いして根こそぎ取ってしまったことがあり、植物・植生担当の菅原先生が怒り、勉強会が必要となって、抜く草、そのままにする草、場所ごとにここにはこういう魚がいるから「たまり」をつくる、といった管理マニュアルを作成し、皆さんに維持管理に参加してもらっています。

こんなに住民の皆さんに手を掛けてもらっている川の例はほかに無いと思います。公共事業では作ったら作りっぱなしが多いです。

とくに生態系の維持管理は役所ではなかなかできない、地域住民が強い思いでやってくれることが一番大切です。いかにこれを継続していくかがポイントだと思います。

2 菅原久夫様からのヒアリング内容

只今ご紹介頂いた菅原です。質問事項書は今初めて見ました。源兵衛川を紹介するパワーポイントを用意しました。細かい内容については次の報告者の加藤先生にお聞き頂ければと思います。細かく調べていらっしゃいますから。

私の専門は植物生態学です。

源兵衛川再生では、調査分野として植生・植物、鳥、昆虫、水生生物、魚類、水質があり、各専門家でチームを作って1年間やります。

こうした調査で問題なのは、調査依頼が遅いことで、予算が下りて 4 月からスタートすると夏や秋頃に依頼が来ますが、種類によっては 1 年通して見

たいものもあるので、2年くらいやることになります。

専門家全員が集まって年間 2,3 日調査をやって、あとは各自がボランティアで調査したと思います。

私はふるさとの重要だと考えています。

楽寿園には照葉樹林のふるさとの森があり、三島の誇る重要な財産です。

こういう自然は殆ど失われてしまいました。

あそこは溶岩状で利用困難であったことと、プライベートな場所であったので残りました。

市民が平地で森に触れられるというのは日本ではなかなか無く、貴重な財産です。

スライドを見ながら説明します。

これは源兵衛川流水沿いの景観で 2 ゾーンです。

ここは水を止めて工事をしました。左半分を工事し、植生や水生生物に影響のないようにして、その後右半分をやるという形です。機械が入らず、殆ど人海戦術でやりました。

この三嶋大社は、これもすばらしいふるさとの森、鎮守の森、自然の森です。

私達の神の住む場所、精神文化を築いてくれた土台だと思います。

明治神宮の森は作られた森ですが、あれもすばらしいです。

明治神宮の森は大正 5 年、野原や畑だった所に作りました。まだ 100 年経っていません。森は作ろうと思えば 100 年であんなにすばらしいものが作れるのです。

明治神宮の森の設計者は、全国から贈られた木を植えず、本来の関東平野の自然植生の中から選んで植え、生態学的にその地域本来のふるさとの森を作ろうとしたのです。

これは三島のお茶畑ですが、これもふるさとの風景の一つです。

私達が居るこの地を含む照葉樹林は世界にここだけにしか無く、この図の様に広がっており、西南日本、中国の南部からヒマラヤにかけてあります。

照葉樹林域はすなわち茶の産地でもあります。茶の文化はここから世界に広がりました。地域によりインド北部、ヒマラヤの麓では紅茶、中国南部ではウーロン茶、我が国では緑茶として嗜好されています。

文化の源泉である照葉樹林を、ふるさとの森として大切にしていきたいと思えます。

これは源兵衛川の 3 ゾーンですが、私達は川の中に大きな石を入れたり、深いところ、浅いところと瀬や淵など多様な環境を色々作りたいのですがなかなかうまくいきません。

このゾーンでも、子供が遊べる所や、一方でサンクチュアリ、つまり人が立ち入れない聖域など、いろいろなゾーン分けをしたいと思います。

この写真で言いたいことは、私達はふるさとの源兵衛川を石油文明の前に戻したい、つまり高度成長前の姿に戻したいのです。

花が美しい、だから何でも植えてしまうという見た目にカラフルで美しい風景を目指してはいません。

本来あるべき自然は、この地域のふるさとの自然として後生に伝えなければいけないのですが、街中でもあるため、ただカラフルで美しくければよいとして園芸植物が植えられてしまいます。

他にも園芸植物が逃げ出したり、帰化植物が入り込んでしまったり。

このように街中での自然の復元は難しい課題です。住民とのコンセンサスがからんでくると思います。

この写真はかわせみ橋の少し上流で、いい感じですが、本来はこんな景観だったかと思います。しかし今はだいぶ公園化していますし、人の歩くところは裸地化して、オーバーユースだと思います。

次の写真は 6 ゾーンで桜の季節を撮ったものですが、オランダガラシなど、明治以降の帰化植物が沢山入っています。本来源兵衛川には無かったものです。

これらは逃げ出したものか、あるいは住民がきれいだからと植えたものかもしれません。

だから私どもからすれば、こうした植物はここにふさわしくないが、反対の立場の人は、皆さんにきれいなものを見てもらいたいという考えですから、難しい問題です。

これは最後の 7 ゾーンで、かつてはコンクリートで固められ、水が流れるだけの何も無い所でしたが、親水化工事をして、ヤナギ類、ハンノキやアシなどを植え、本来の日本の川の風景を復元しました。

ここの風景は国道 1 号線をドライブすると見えます。静岡東部の平地の湿地帯の林を見られるという点で貴重だと思います。これがかつてのふるさとの河川沿いや低湿地の我が国の原風景です。

河川沿いは殆ど開発されてしまい、こういう風景が無くなってしまいました。

但し管理は大変です。草刈りや帰化植物を取り除いたりといった手入れをボランティアが定期的にやっています。その意味で、私達が深く関わっていないと存続できない自然です。

このスライドは「都市の植生」を分類したものです。

私は楽寿園から中郷温水池までの源兵衛川沿いは、都市に復元された緑の回廊として、できればふるさとの木を中心として残して行きたいと思います。

これは街中であって幅の無い弱い、線としての自然ですから、私達がきちんと管理していかないと存続できないのです。

この写真は、園芸植物の逸出植物の例としてヒメヒオウギズイセンを挙げました。これはオレンジ色の花で、庭に植えたものが逃げ出して源兵衛川沿いに一面に繁茂したものです。私は源兵衛川にふさわしくない風景であると考えます。

これはホテイアオイで、キンギョなどの飼育に利用され、また観賞用帰化植物が逃げ出したものです。特に中郷温水池はこれが一面に繁茂して、池の中にまで光が入らなくなる状態になってしまい、他の動植物やプランクトン等に大きな影響が出ました。そこで三島市が駆除に乗り出し、人海戦術で全部取り除きましたが、大変な予算が掛かりました。最初にきちんと管理していればこんなことにはなりません。

これはその年の気温、水温で一気に増えたりします。繁殖力がすごく強く、他の動植物にすごい影響があります。

これはイケノミズハコベで、4、5年前に初めて確認されました。こういうものがどんどん入ってくる可能性があります。

これは源兵衛川流域の1991年と2008年の植生のデータを比較した表です。こうやって比較すると、私達が手を入れて少しは良くなっているかと思うと、そうでもないことがわかります。

このエビモは日本の河川に本来あるものですが、2008年は全く出てきません。

ヤナギモも自生種ですが、強いらしく、2008年も植生常在度V(80%以上)で、群落として見られました。

他にセキショウモはほとんど見られなくなったなど。

このように植生は 1991 年と 2008 年でいろんな意味で変わっています。

ミシマバイカモは無かったのが、今日観られるのはすべて植栽で増えています。

大切なことは、ミシマバイカモだけが重要ではなく、家族と同じで、セットとしていろんな種類があってこそ植物社会が成り立ちます。すなわち生態系として維持されるのです。貴重だからそれだけを守るのではなく、すべてを環境として守っていくことで自然が維持されるのです

魚、水生昆虫、プランクトン、バクテリアと共に、生物社会としての生態系を維持するという発想が肝腎です。

外来植物の例を示します。このツタバウンランやキシノウブは花としてはきれいですが、ものすごく増えています。

ハナニラ これは庭から逃げ出したものです。

ハーブ これは皆さん好きで、庭に植えたものが、川沿いは窒素分が多く水分条件がよいからあつというまに繁茂してしまいます。

ヒメツルソバ これは 5、6 年前から急激に増えました。

キダチチョウセンアサガオ属 これはこんなに大型の植物で、7 ゾーンの風景が変わる程のものです。

タイワンホトトギス これもきれいですが、庭から逃げ出したものです。

バイカモ これは植栽です。

トウカイタンポポ これは昔からあるものがたまたま第 7 ゾーンで見つかりました。いい環境を作れば昔のものが戻る可能性があるのです。

環境や自然が大事だという問題意識はあっても、緑があれば良いという発想になってしまっているのが問題です。緑の質が問われているのです。

本来の自然の多様性の意味を突き詰めていかないといけないと思います。

種の消失、単純化、湧水沿いの画一化という現状がある中で、身近な自然や源兵衛川とどう向き合うかがすごく大きな課題だと思います。

法制度としては、平成 16 年、特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（特定外来生物法）が出来、これにより外来生物の除去が行われます。

もう一つは生物多様性国家戦略 2010、これは外来植物、帰化植物の駆除、管理と同時に、日本にある本来の風景を守っていこうというものです。

植物個体としてではなく、多様な植物種の集合である日本の風景・景観を守る、風土を育てて来た自然をきちんと守るということです。

生物多様性を社会に浸透させるとか、地球規模の視野を持って、そこにしか無い、三島にしか無い源兵衛川の自然を守って、次の世代に対し、私達のふるさとはこういうものだったということを伝えることが大事です。

本来日本にあったものが価値である、長い歴史があるからです。外来植物とどう向き合うかが問題です。

これは「レッドデータからグリーンデータへ」と題したスライドです。レッドデータ、これは貴重なものを大切にすることで、もちろん重要です。しかしトキの様にケージの中でなく、自然の中で飛び回るのが本来の姿です。

できれば野外で貴重な動植物が見られるようにしないとイケません。

外来生物法、これは外来有害生物の駆除や管理を行うものです。

一方、グリーンデータというのは、植生のごく普通に存在する全体を保全するという事です。

多いものも少ないものもすべて価値があるということで、源兵衛川では緑の戸籍簿づくり、つまりどこにどんな植物があるか、すべてリストを作りました。

全体を見る目があって、初めてレッドデータや外来植物と関わる話になるのですから、ベースとなる植生の全体像をきちんと作りました。

生物を含めた全体の生物集を継続して見続けて、ベースとなるものがあったて、初めて貴重な植物の保護、外来植物の駆除等の話になります。

植生全体の中で自然を見るというのが大事です。

スライドに関してはこれで終わりです。

予めの質問事項については何も答えていませんが、質問があればお答えします。

3 質疑応答

佐藤：事前には、源兵衛川の水がきれいになったとか、トンボが飛ぶようになったという話を聞いていた。しかし今の話で植物の状況は悪化しているとの事だが、植生を豊かにする実践は始まっているのか。

菅原氏：GW三島とそういう方向で進めています。

しかし、個人で園芸植物を植える人とのコンセンサスは得られていないし、三島市もそうした事には深く関わっていないと思います。

私は言いつばなしで、あとはGW三島の人が苦勞していることと思います。私たちは植物の側・昆虫の側などからの発信をして、皆さんの勉強の機会

となる観察会に呼ばれてキシノウブを除去し、本来のセキシウモを植える活動等を一緒にやり、そうした話もしています。

佐藤：感想になるが、弁護士観点としては、人が大事に植えた物を取ってしまったら所有権や景観とかが問題になるのではないかと、トンボが増えるのはみんな喜ぶが、どの植物があるべきかは、価値観がぶつかるのでかなり難しいのかと思う。

越沼正氏：川べりの人が外来植物を植えています。その人は、植えると私のガンが治るとか言うのです。「花が咲いてきれいだから取らないで」と言うので手を付けられません。愛着を持って育てているから。

村上茂之氏：カフェの下の直線部分の所で、外来植物等を少しずつ除去しながらふるさとの川を戻そうとしています。

小松氏：皆さんにお渡しした「源兵衛川わくわく観察ブック」は専門家に執筆してもらい、これで子供に勉強してもらいますが、大人にも勉強してもらいたいという気持ちも込めています。じわじわ浸透していくといいなと思っています。

ホタルも、飛んでいるものだけがホタルではありません。知らないで踏みつけてしまったりということもあります。

源兵衛川の再生についてはこの冊子の 19 頁あたりに載っています。

ホテイアオイが満杯の写真もあります。

越沼正氏：GW三島でホテイアオイ除去を始め、2 年経って三島市とタイアップで人海戦術で全部取りました、その予算は 400 万円でした。

阿久津：ホトケドジョウやホタルは川が汚染されていた時も細々と居たのか。

菅原氏：ホトケドジョウはその通りです。

ホタルは養殖している人がいて、そこからスタートしたかもしれません。

私が強く思うのは、環境の消失は種の絶滅につながるということです。

環境を守っていれば、生物の復元能力、生命力は強いと思います。

日本全土で生息環境を失うことが種の絶滅、植生・生態系の単純化に繋がります。

環境さえ守れば、自然は時間がかかっても復元する力を持っています。

高度成長以降、森林がなくなる、雑木林が放置されてしまうというふう環境が大きく変化し、失われました。

雑木林は人間がきちんと管理すれば多様性が保たれますが、放っておくと違うものになってしまうのです。

基本的な考えとしては、やはり私達が環境をきちんと見守るということです。

以上

三島市周辺の現地調査報告書

～松毛川～

日 時：平成 25 年 6 月 15 日(土) 午前 10 時より

場 所：松毛川・三島市川岸

ヒアリング先：NPO法人グラウンドワーク三島専務理事・事務局長、
都留文科大学教授 渡辺豊博様

参加委員：鈴木健司、高橋邦明、阿久津正志、大川淳子、長崎玲、雪下伸明、
佐藤穂貴、農端康輔、榊原功、三浦忠司

報告者 高橋邦明

1 松毛川

松毛川は、三島市南端にある三日月形の止水域である。

以前は、狩野川の一部であったが、昭和初期の堤防工事により止水域となり沼津市側では灰塚川と呼んでいる。

ただ、全国的にも珍しく現在も旧河川敷が残っており、旧河川敷兩岸に密植するエノキ、ムクノキ、ケヤキなど巨木と水辺空間には、全国的にも貴重な水辺自然環境が残っている。

水辺自然環境は、過去の伊豆などにみることができた自然環境や動植物が生息しやすい自然環境が整っているため、渡り鳥などの多くの野鳥が飛来したり、絶滅危惧種のメダカや海と川を行き来するトウヨシノボリなどが生息している。



しかし、現在は、旧河川敷周辺にはゴミが放置されるなどされ、釣り具による鳥類被害、河畔林の倒木や枯死、水質悪化、堆積物による湛水たんすいなどの環境被害や農業被害が発生し、地域の宝物が傷つき始めている。

そこで、NPO法人グラウンドワーク三島では、地元住民や隣接自治会、行政、専門家、そして、未来を担う子供たちとの協働による新たな森づくりに取り組んでおり、これまでに約1,600本の植林を進めてきた。

現在、「松毛川千年の森トラスト運動」を開始し、地元住民による愛護組織「松毛三日月会」等とも協働した新たな森づくりや、親水事業、水辺自然環境の改善再生活動などの「千年の森づくり」に取り組んでいる（NPO法人グラウンドワーク三島ウェブサイトより抜粋）。

2 竹林の伐採活動

当初の予定では、本現地調査で松毛川の旧河川敷に植林をする予定であったが、調査日前の大雨によって足場がわるいため、旧河川敷に繁茂する竹林の伐採活動を行った。

竹林を伐採することで、新たな植林が可能となる土地を確保でき、伐採した竹林を細かく裁断して肥料として土地にまくことで、植樹した樹木の成長も期待できる。





3 成果

ヒアリング先の渡辺様、GW三島の村上様、参加委員11名で協力しあって竹林を伐採した結果、竹林の伐採が飛躍的に進み、伐採前は竹林によって邪魔されて見えなかった川面が見えるようにまでなった。

三島市周辺の現地調査報告書

～せせらぎシニア元気工房～

日 時：平成 25 年 6 月 15 日(土) 午後 2 時より
場 所：悠遊工房ひろかわ(三島市加茂川町)
ヒアリング先：遊水匠の会代表 小浜修一郎様
参加委員：鈴木健司、高橋邦明、阿久津正志、大川淳子、雪下伸明、佐藤穂貴、
農端康輔、榊原功、三浦忠司

報告者 榊原 功

平成 25 年 6 月 15 日(土曜日) 午後 2 時頃、せせらぎシニア元気工房の活動拠点がある悠遊工房ひろかわ(三島市加茂川町)を訪問し、同工房の代表者である小浜修一郎様から、15 分程度お話を伺ったので、下記のとおり報告する。

第 1 位置づけ

NPO 法人グラウンドワーク三島の環境コミュニティ・ビジネスを担当する集団の一つ。

第 2 構成メンバー

リタイアした世代を中心に 15 名程度。そのうち常時参加しているのは 7、8 名。

第 3 活動内容

間伐材や放置竹材を活用した木工品（置いてあった天水桶が印象的でした）の製作。

事務所や新三島街中カフェの改修

実践地の維持補修工事

イベントで使う竹あかりの制作

学校ビオトープの造成

放置竹林の間伐作業

庭木の手入れ（ただ、依頼があっても、時間が合わなければお断りするそうです）

第4 収入

年間700万円程度（お得意さんが結構いるとのこと）。

第5 悩み（？）

メンバーの中にスキルの高い人とそうでない人がおり、そうでない人も必要な人材なので、報酬は同額にしているが、それに対しては一部不満の声もある。

以上

全体総括・質疑応答

日 時：平成 25 年 6 月 15 日(土) 午後 3 時より

場 所：三島商工会議所

ヒアリング先：NPO 法人グラウンドワーク三島専務理事・事務局長、
都留文科大学教授 渡辺豊博様

参加委員：鈴木健司、高橋邦明、阿久津正志、大川淳子、雪下伸明、佐藤穂貴、
農端康輔、榊原功、三浦忠司

報告者 大川淳子

1 全体総括について

グラウンドワーク三島の活動のポイントについて、以下の指摘がなされた。

- ・ 組織であって組織でない自由闊達な緩い横のネットワークという特徴を活かす。多様な人的ネットワークをいかに絡めて、コントロールするか。
- ・ 専門家の活用。情緒的、感情的になる要因に専門性の欠如がある。「おとな」の関係をつくるのに、専門家が必要となる。
- ・ 対立を緩和するための代替案の用意（静岡空港の例：空港を認めるが、自然林をつくる。）
- ・ 現場からのボトムアップアプローチを基本に、市民、行政、地域団体、企業が有機的に連携していくパートナーシップアプローチ、また、人々の心を変えるポリスティック（包括的、総括的）アプローチ（例：前は 20 人が源兵衛川にごみを捨て 3 人が拾っていたが、今は 3 人が捨てても 20 人が拾う。）
- ・ 市民、NPO、企業、行政の中心にいるというインターメディアート（インターメディアリー）の力。問題意識を共有化し、人を束ねて、70 点ぐらいのところをみつけて、実現する。
- ・ NPO の活動を自立的・継続的なものとするための NPO ビジネスの新たな形。スタッフの年収が保障されなければ継続は難しい。グラウンドワーク三島が出店したお店となると信用性があるので、すぐにビジネスになる。公益的な活動が営業活動の基盤を支えている。
- ・ 次世代の人材をどうするか？給与の支払いが保証される仕組みをつくれば、優秀な人がくる。

2 質疑応答

参加者からの質問に対する渡辺氏からの回答や紹介された事例等は、以下のとおり。

- ・ 営利事業は最近スタートした。これまでの主な活動資金は、政府からの補助金や企業からの助成金。
- ・ 会費や寄付金を集めるのはビジネスととらえるべき。
- ・ NPOに対するイギリスの成果主義の紹介（「ブルースカイ」の事例では、出所者の再犯率をどれだけ下げたかという成果に応じて公的支援額が決まる。）
- ・ イギリスでは、NPOが「中間労働市場」を創出し、役所には対応できないニッチなところの公的役割を担っている。国の補助金も、市民からの寄付も、日本より多い。
- ・ NPOが玉石混淆になっている（岩手の「石巻のキセキ」の事例）。
- ・ 寄付文化についての欧米と日本の違い（ロンドンマラソンの事例、出場・完走すると寄付を周囲の人がする。）。イギリスでは、行動してお金を集めるということの子供の頃から実践している。
- ・ NPOは中小零細企業と同じ。日本の中小企業に対する幅広い公的支援（結果的に回収できていないものも多い）と同様、NPOへも基本的に無差別に融資を行うべき。一方で、NPOへの補助金や融資も、1年ごとにレビューをして、評価し、仕分けすればよい。査定のポイントは、地域の中での評価。
- ・ NPOがより活躍できる社会の仕組みづくりに、弁護士が貢献できないか？

以上

【感想】

昔訪れた源兵衛川の記憶は、コンクリートの壁と水の流れていない汚れた水路跡である。それがいつの間にか、水が流れ、カワセミが飛び、人々が川沿いの散歩を楽しむ川となっていた。その変化の裏にNPO、地元企業、行政、住民が連携したプロジェクトがあったということを今回初めて知ることとなった。

それぞれの立場があるため、「きれいな川を」という同じ目標があっても、異なる立場での主張は必ずしも相容れるものではない。NPO支援の環境が整っているとはいえない状況の中での取りまとめには多大な苦労を伴ったことと思う。グラウンドワーク三島では、お互いにとって70点ぐらいの妥協案を提示してまとめていくという現実的な路線があったからこそ、今の清流を取り戻すことができたのだろう。

イギリスがいかにNPO先進国であるかということも、今回の視察で学んだ

ことの一つである。文化、歴史的背景の異なるイギリスの仕組みをそのまま日本へ取り込むことは容易ではない。しかし、今の日本の制度を改革していくための大きな示唆になると思う。

きれいな水、川沿いの緑には、不思議と癒しの効果がある。普段、仕事に忙殺されてなかなか意識すらもできないが、実際に視察の現場に行ってみると自然のありがたさを再認識し、また、現場の問題に直面して今後のあり方を考えさせられる。今回、考えるきっかけを与えてくれ、そして何より、ゴミ拾いから始めて、ついに清流をよみがえらせた人々の力に心から感謝の意を表したい。

以上

源兵衛川が問うもの

田中清治

源兵衛川は、三島市の名勝楽寿園の湧水を水源とし、三島市の中心部を南北に流れて中郷温水池に至る全長約1.5キロメートルの農業用水路である。富士山からの豊富な湧水を目当てに多くの工場進出がなされる昭和30年代までは、子供たちの水浴の川であった。蛍がとび、みしま梅花藻の繁茂する川であった。現にグラウンドワーク三島の中心メンバーの渡辺豊博さんなども、源兵衛川で水遊びをした少年の一人であった。

企業による大量の水の汲み取りにより源兵衛川の流量はたちまちにして減量してドブ川となった。流域の短い川であるから、流量の因果関係は明瞭である。源兵衛川は農業用水路ということもあって、県や市は水環境の整備事業などに予算を付けたりしているが、根源的問題として、湧水が増えるものではないであろう。水は環境摂理の根底にあるものであるから、いかなる利権があったとしても、水利用が環境破壊に及ぶときには公共の福祉に反するわけであるから、その利権は制限されてしかるべきではないだろうか。言い換えれば企業には水利用に当たって、技術的にもベストを尽すだけでなく、環境的にも十部に配慮する責務があると思う。

ドブ川源兵衛川は、現在ではグラウンドワーク三島の人たちの多年にわたるせせらぎの復元活動、東レから水の還流によって現在では蛍も現れる清流になっている。三島梅花藻も再生している。しかし山口東司さんによると梅花藻は清流にのみ生存できるのであって、今でも、日日、手をかけているのであって栽培に等しい。

源兵衛川の清流の緑陰には、プロムナードが整備されていて、観光客も散策している。それは三島市を含めて人々の善意の賜物であるが、それは水の街三島の自然が人々を呼び覚ましたものでもある。

以上